とめをして、なほ本願にえらばれし諸行をならへむことのよしなきなり、これによりて善導和尚のたまはく、専をすてゝ雑に趣くものは、千の中に一人も生れず、もし専修のものは百に百ながら生れ、千に千ながら生るといへり。（唯信鈔）

十三の得失といふは、念佛は本願の行なるが故に佛の本願と相應するが故にといふなり、餘の善は本願にあらず、故に佛の本願に不相應といふ、教に違せざるが故にといふは、淨土の三經の中に、處々に念佛をあかし、もて勝行とす、餘善はしか

らず、故に不違教故といふ、念佛はこれ十方恒沙の諸佛の證誠なるが故に、隨順佛語といふ、貪瞋諸見さたりて間斷せずといふは二義あり、つぎに雜行を修するもの、煩惱おこるといへども、行のなかの起惡微細にしてわきまへがたし、そのとがをしらざるがゆへに慙愧の心なし、念佛を行ずるものは常に慙愧を修す、念々稱名常慙愧といへり、正行を修するものは佛恩を報ず、（已上）雜行を修するは心に驕慢を生ず、名利を相應すといふは、正行を修するものは、ひとへに佛の大願をた

のむ、雑行を修するものは、こゝに三學ありと念じて、貴已等佛の見を起す、故に慢舉を生ぜるなり、人我自らおほふといふは、正行を修するものは、自機をしりて貴已を生ぜ、善友に親近す雑行を修するものは、自らの三學をたのみて心高慢をいだく、故に名利と相應す、かくのごとく得失を判ぜること、たゞこれ佛說にまかす、なんぞ謗法といはん。

（法華問答）

◎利他の信樂うるひとは、願に相應するゆへに、教と佛語にしたがへば、外の雑縁さらになし。

本願相應せざるゆへ、雑縁さたりみだるなり、信心亂失するをこそ、萬不一生とのべたまふ。

（和讃）

◎佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雑修となづけてぞ、千中無一ときらはるゝ。

（和讃）

專修のひとをほむるには、千無一失とおしへたり雑修の人をきらふには、萬不一生とのべたまふ。

（和讃）

◎我死せばいかなる人もみなともに雑行すてゝ彌陀をたのめよ。

（遺德記）

正行の中の正助二業に就て

◎正雜の分別をきゝわけ、一心一向になりて信心決定のうへに、佛恩報謝のために、念佛まうす心はおほきに各別なり。（御文）

◎たゞもろ〳〵の雜行をすてゝ、正行に歸するをもて本意とす、その正行に歸するといふは、なにのやうもなく、彌陀如來を一心一向にたのみたてまつる理りばかりなり。（御文）

◎此正の中に就て復た二種あり、一は一心に專ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、是を正定の業と名く、彼佛願に順ずるが故に、もし禮誦等に依るをは、即ち名て助業とす、此正助二行を除いて、已外の自餘の諸善をば悉く雜行と名く。（散善義）

◎正行といふは、之に付て開合の二義あり、初に開して五種となし、後には合して二種とす、初に開して五種とすとは、一には讀誦正行、二には觀察正行、三には禮拜正行、四には稱名正行、五には讃嘆供養正行なり、次に合して二種となすとは、一には正業、二には助業なり、初に正業とは、上の五種の中の第四の稱名を以て、正

定の業となす、次に助業と云は、第四の口稱を除きての外、讀誦等の四種を以て而も助業とす。

（選擇集）

●正行を修せむとおもはゞ、正業助業二の中に助業がさしをくべしとなり。

（尊號眞像銘文）

●善導和尚は正行と雜行とをたてゝ、雜行をすてゝ、正行に歸すべきことはりをわかし、正業と助業とをわかちて、助業をさしをきて、正業をもはらにすべき義を判せり。

（眞要鈔）

●或は主君につかへて奉公をはげむもの、或は商賣をことゝして世路をわしるやから、六字の名號すら、これをとなふるに、なをものうく、ひとまなし、いはんや長日に阿彌陀經を誦せよとすゝめ、六時に禮讃を行せよと教へば、淨土を願ふ者はいとありがたかるべし、この故に祖師聖人、もとより、下根の衆生を先として、おこしたまへる本願の意趣をしりて、心を四種の功業にかくべからぜ行を第四の正業に專にすべきよし、これをすゝめらるゝところなり。

（破邪顯正鈔）

●自力とまふすことは、行者の各の緣にしたがひ

自力他力に就て

て、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して、わが身をたのみ、我計ひの心をもて、身口意のみだれ心をつくろひ、めでたうしなして淨土へ往生せんと思ふを、自力とまうすなり、又他力とまふすことは、彌陀如來の御ちかひの中に、選擇攝取したまへる、第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまふすなり、如來の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと聖人のおほせことにてありき、義といふことは、はからふことばなり、行者のはからひは自力なれば義といふなり、他力は本願を信樂して往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり、然れば我身のわるければ、ひかでか如來むかへたまはんと思ふべからぞ、凡夫はもとより煩惱具足したるが故に、わるきものと思ふべし又我心のよければ往生すべしと思ふべからぞ、自力のはからひにては眞實の報土へ生るべからざるなり。

（末燈鈔）

●たとひ聖教に眼をさらし、いろくなる法門とをしりたりとも、それにて生死は離れがたく候、たゞ不思議の願力に乘じ、無智不辨の身なれども

信心一にて報土往生をとげ候へば、かりそめにも私の計あるまじく候、我等が信心と申は、如來のたまはる信心なれば、これを一心とも又は金剛心とも申ことなり、自力のはからひにて、報土の往生かなひがたく候、たゞ佛智にまかせ念したまふべく候。

（教名集）

自力聖道の菩提心、心も言もおよばれぬ、常沒流轉の凡愚はいかでか發起せしむべき。

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなゝがら、如來の弘誓に乘ぜなり。

専修は師ち信心なり

たゞ二心なく佛智の不思議をたのみ、ふかく智識のをしへをまことゝ信じて、一分もわがはからひを加へぬ、無疑無慮になりかへるをもて、他力に乘ぜるすがたとす、これを決定往生の機とす。

（和讃）

これを一向專修の人となづけ專修專念一向一心に、彌陀に歸命するをもて本願を信樂する体とす。

（顯名鈔）

もろ〳〵の雜行をすて〳〵專修專念なれば、かならず遍照の光明のなかに、おさめとられまいらする

（御文）

なり、これまことに我等が往生の決定するすがたなり。

（御文）

第六項　他力の廻向

信心を獲得するは他力の回向なり

◉夫れ以れば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。（教行證文類）

◉爾れば若は行若は信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の、廻向成就したまふ所にあらざることなし。（教行證文類）

◉横超とはこれ乃ち願力廻向の信樂、これを願作佛心といふ。（教行證文類）

◉信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり。（和讃）

◉論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ。（和讃）

◉智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり、信心の智恵なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし。（和讃）

◉釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われ

らが無上の信心を發起せしめたまひけり。（和讃）

●釋迦如來、彌陀佛、われらが慈悲の父母にて、さまゞの方便にて、われらが無上の信心をば、開き起させたまふと候へば、まことの信心のさだまることは、釋迦彌陀の御はからひとみへてさふらふ、往生の心うたがひなくなりさふらうは、攝取せられまいらせたるゆへとみへて候。（末燈鈔）

●この信心のおこることも、釋迦の慈父彌陀の悲母の方便によりて、無上の信心を發起せしめたまふとみへたり、これ自然の利益ありと知るべし。

●十方諸佛の證誠、恒沙如來の護念、ひとへに眞實信心の人のためなり、釋迦は慈父、彌陀は悲母、われらが父母として、信心を教へたまへりと知るべし。（唯信鈔文意）

●唯親鸞がすゝむる所は、第十八の他力の信樂を、如來の御誓にてうるゆへなり、これを信心とはいふ、この信心といふは他力の一心なり。（教名集）

●佛智他力のさづけによりて、本願の由來を存知するものなりと心うるが、すなはち平生業成の義な

り。

（御文）

かくのごとくこゝろへてのちは、彌陀如來の他力の信心を、われらにあたへたまへる、御恩を報じたてまつる念佛なりとこゝろうべし。

（御文）

信ぜる心も、念ぜる心も、彌陀如來の御方便よりをこさしむるものなり。

（御文）

佛智より他力の信心をあたへたまふ。

（御文）

彌陀如來の御かたより、さづけましくたる信心とは、やがてわらはにしられたり。

（御文）

第七項　宿善の開發

信心の獲得は宿善の開發に由る

無量壽大經に曰く、若し人善本なければ此經を聞くことを得ず、清淨にして戒を有てるもの、乃し正法を聞くことを得、第五に云く、むかし世尊を見奉りて、則ち能く此事を信ず、億の如來に奉持して樂しんで是の如きの敎を聞く、第六に無量清淨覺經に云く、善男子善女人、淨土の法門を說くを聞て、心に悲喜を生じ、身の毛はよだち拔出つるが如くするものは、當に知るべし、此人は過去の宿命に已に佛道をなせるなり。（安樂集）

念佛を信ぜる者豈此益なからん、彼一生惡業を作

り、臨終に善友に遇ひ、繰に十たび佛を念ぜれば即ち往生を得、かくの如き等の類、多くはこれ前世に淨土を欣求し、彼佛を念せる者の、宿善内に熟して今開發すらくのみ、故に十疑に云く、臨終に善知識に遇ひ、十念成就するもの、並に是れ宿善強して、善知識を得て十念成就すと云へり、問ふ、下々品の生、もし宿善に依らば、十念生の本願は即ち名のみ有りて實無らん、答ふ、設ひ宿善ありとももし十念なくんば、定て無間に墮て苦を受くること窮りなけん、臨終の十念はこれ往生の

（往生要集）

勝縁なり。

◎適〻行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。（教行證文類）

◎十方衆生のなかに、淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり、いかんとならば、大經の中にとくがごとく、過去の宿善あつきものは、今生にこの教にあふてまさに信樂す、宿福なきものはこの教にあふといへども、念持せざればまたあはざるがごとし、欲智過去因の文のごとく、今生のありさまにて、宿善の有無あきらかに知りぬべし、しかるに宿善開發する機のしるしには、善知識にあ

ふて開悟せらるゝとき、一念疑惑を生ぜざるなり
その疑惑を生ぜざることは、光明の縁にあふゆ
へなり。

（口傳鈔）

宿善のあつきものは、今生も善根を修し、悪業を
おそる、宿善すくなき者は、今生に悪業を好み、
善根をつくらず、宿善の善悪は今生のありさまに
て明に知りぬべし、然るに善心なし、はかりし
りぬ、宿善すくなしといふことを、われら罪業お
もしといへども、五逆をはつくらぜ、善根少しと
いへども、ふかく本願を信せり、逆者の十念すら

宿善によるなり、いはんや盡形の稱念、むしろ宿
善によらざらむや、何の故にか逆者の十念をば宿
善ふかしとおもひ、われらが一生の稱念をば宿善
あさしと思ふべきや、小智は菩提の妨といへる
まことにこのたぐひか。

（唯信鈔）

過去久遠に三恒河沙の諸佛の、よにいでたまひし
みもとにして、自力の大菩提心をおこしき、恒沙
の善根を修せしめしによりて、いま大願業力にま
うあふことをえたり、他力の三信心をえたらん人
は、ゆめ〳〵餘の善をそしり、餘の佛聖をいやし

うすることなかれとなり。

（唯信鈔文意）

●願力不思議の佛智をさづくる、善知識の實語を傾解せゞんば往生不可なり、宿善開發の機として、他力往生の師說領納せば、平生をいはゞ、臨終を論ぜゞ、定聚の位に住し、滅度にいたるべき條、經釋分明なり。

（改邪鈔）

●まことにこれ希有最勝の要法、決定往生の業因なり、おほろげの緣にてはたやすく聞うべからゞ若し聞えてよろこぶ心あらば、これ宿善の人なり

（淨土見聞集）

●宿善めでたしといふはわろし、御一流には宿善難有と申すがよく候由仰られ候、他宗には法にあひたるを宿善といふ、當流には信をとることを宿善といふ、信心をうることと肝要なり。

（御一代聞書）

●されば彌陀に歸命すといふも、信心獲得すといふも、宿善にあらゞゞといふことなし、しかれば念佛往生の機根は、宿因のもよほしにあらゞゞは、われら今度の報土往生は不可なりとみへたり、このゝろを聖人の御ことばには、たまく信心を獲ば

遠く宿縁をよろこべとおほせられたり、これによりて當流のこゝろは、人を勸化せんとおもふとも宿善無宿善の二を分別せざれば、いたづらごとなるべし。

（御文）

平生に彌陀如來の本願の、我等をたすけたまふことはりをきゝひらくことは、宿善の開發によるがゆへなりと、こゝろへてのちは、我力にてはなかりけり。

（御文）

まことに宿善の開發にもよふされて、佛智より他力の信心をあたへたまふ。

（御文）

然るにこの光明の縁にもよほされて、宿善の機ありて、他力の信心といふことをば今すでにえたり。

（御文）

宿善開發の行者、一念彌陀に歸命せんとおもふ心の一念をこるきざみ、佛の心光かの一念歸命の行者を、攝取したまふ、その時節をさして至心信樂欲生の三信ともいひ、またこのこゝろを願成就の文には、卽得往生住不退轉とゝけり、或はこの位をすなはち眞實信心の行人とも、宿因深厚の行者とも、平成業生の人ともいふべし、されば彌陀

何をか善知識といふや

に歸命すといふも、信心獲得すといふも、宿善にあらざるといふことなし。

（御文）

●これによりて五重の義をたてたり、一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名號、この五重の義成就せざれば、往生はかなふべからざるとみへたり。

（御文）

第八項　知識の化導

●第一に勸めて善知識に託すとは、法句經に依らば衆生のために善知識となる、實明菩薩あり、佛に白して言く、世尊如何か名けて善知識となす、佛言く、善知識とは能く深法を說く、謂く空と、無相と、無願と、諸法平等にして業なし、報なし、因なし、果なし、究竟如々にして實際に住す、然に畢竟空の中に於て、熾然として一切の諸法を建立す、是を善知識とす、善知識とは是汝が父母なり、汝等の菩提の身を養育するが故に、善知識とは是れ汝が眼目なり、能く一切の善惡の道を見るが故に、善知識とは是汝が大船なり、汝等を運度して生死海を出るが故に、善知識は是れ汝が絙繩なり、能く汝等をひきぬきて生死を出すが故なり

又勸めて衆生のために善知識となると雖も、必ず須く西に歸すべし。

（安樂集）

●總じていふときは、眞の善知識といふは諸佛菩薩なり、別していふときは、我等に法をあたへたまへる人なり、またまさしく自ら法を說きて聞かする人ならぬとも、法を聞かする緣となる人をも善知識と名く、されば善知識は諸佛菩薩なり、諸佛菩薩の總體は阿彌陀如來なり、その智慧をつたへその法をうけて、直にもあたへ、又知られん人に導びきて、法を聞かしめんはみな善知識なるべし

信心の獲得は善智識の化導による

しかれば佛法をきゝて生死をはなるべき源は善知識なり。

（眞要鈔）

●君を思ふは我を思ふなり、善知識のおほせにしたがひ、信をとれば極樂へまいるものなり。

（御一代記聞書）

●このたび、もし善知識にあひたてまつらざれば、われら凡夫かならず地獄に落つべし、然るに今聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりを胸におさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土の生れがたきを一定と期すること

と、更に私の力にあらぎ、たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるを、いつはりて往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふに、すかされまいらせて、我地獄に落つといふとも、さらにくやしむ思あるべからぎ、故聖人のわたらせたまふところへ、まいらんと思ひかためたれば、善惡の所生私の定むる所にあらぎといふなりと。

（執持鈔）

●釋尊善導この法をときあらはしたまふとも、源空親鸞出世したまはぎは、我等いかでか淨土をぬがはん、たとひまた源空親鸞世に出たまふとも、次第相承の善知識ましまさぎは、眞實の信心をつたへがたし、善導和尚の般舟讃にいはく、若し本師知識の勸めに非ぎんば、彌陀の淨土如何してか入らむといへり、五會法事讃にいはく、曠劫已來流浪すること久し、隨緣六道輪廻を受く、往生の善知識に遇はぎんば、誰か能く相勸めて廻歸することを得んといへり。

（眞要鈔）

●すでに攝取の心光におさめられ奉り、ながく捨てられ奉らぎ、御誓にあひ奉ること、これ善

知識の恩德なり、まことに報じてもつきがたし。

（見聞集）

●この御ことはり、聽聞まうしわけさふらふこと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識の、淺からざる御勸化の御恩と、ありがたく存し候

（改悔文）

●又或人の言に云く、たとひ彌陀に歸命すといふとも、善知識なくばいたづらごとなり、この故に我等に於ては、善知識ばかりをたのむべしと云々、これもうつくしく當流の信心をえざる人なりときこえたり、そもくく善知識の能といふは、一心一向に彌陀に歸命したてまつるべしと人をすゝむべきばかりなり、これによりて五重の義をたてたり一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名號、この五重の義成就せゞば、往生はかなふべからざるとみえたり、されば善知識といふは、阿彌陀佛に歸命せよといへるつかひなり、宿善開發して善知識にあはゞば、往生はかなふべからざるなり、然れども歸する所の彌陀をすてゝ、たゞ善知識ばかりを本とすべきこと、大な

疑心あるか故に信じ難し

るあやまりなりと心うべきものなり。（御文）

第九項　難信の所由

●難は疑情なり。（愚禿鈔）

●それ菩薩ありて、疑惑を生ずるものは大利を失すとす、この故に應に明に諸佛の無上の智慧を信ぜべし。（無量壽經）

●若し人善根を種へて、疑へば則華開けず、信心清淨なれば華開て則ち佛を見たてまつる。（易行品）

●生死輪轉の家に還來することは、決するに疑情を

以て所止とす。（正信念佛偈）

●薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲がたく、極果證しがたきなり、何を以ての故に、往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛るゝに由るが故に。（文類聚鈔）

●世の人常にいはく、佛の願を信ぜざるにはあらざれども、我身の程をはからふに、罪障のつもれることは多く、善心の起ることは少し、心常に散亂して一心をうること難し、身とこしなへに懈怠にして精進なることなし、佛の願ふかしといふとも

いかでか此身を向へたまはんと、此思ひ誠に賢きに似たり、憍慢を起さゞ高貢のこゝろざし、然れども佛の不思議力を疑ふとがあり、佛いかばかりの力ましますと知りてか、罪悪の身なれば救はれがたきとおもふべき、五逆の罪人すら、なほ十念の功ゆへに刹那の間に往生をとゞ、況んや罪五逆にいたらゞ、功十念にすぎたらんをや、罪ふかくば愈極樂をねがふべし、破戒罪根の深きを簡ばゞといへり。

（唯信鈔）

世の中の人の云く、たとひ彌陀の願力をたのみて極樂に往生せむとおもへども、先世の罪業しりがたし、いかでかたやすく生るべきや、業障にしなぐわり、順後業といふは、必ず其業をつくりたる生ならねども、後々生にも果報をひくなり、されば今生に人界の生をうけたりといふとも、悪道の業を身にそなへたらむことをしらず、かの業力つよくして悪趣の生をひかば、淨土に生るゝことかたからむかと、此義まことにしかるべしといへども、疑網たちがたくして、自ら妄見をおこすなり、凡そ業ははかりのごとし、重きものまづひく

もし我身にそなへたらむ悪趣の業力つよくは、人界の生をうけゞしてまづ悪道におつべきなり、すでに人界の生をうけたるにて知りぬ、たとひ悪趣の業を身にそなへたりとも、その業は人界の生をうけし五戒よりは力弱しといふことを、もし然らば五戒をだにもなほさへず、況んや十念の功徳を、や、五戒は有漏の業なり、念佛は無漏の功徳なり五戒は佛願のたすけなし、念佛は彌陀の本願の導く所なり、念佛の功徳はなほし十善にもすぐれ、すべて三界の一切の善根にもまされり、いはんや五戒の少善をや、五戒をだにもさへざる悪業なり往生のさはりとなることあるべからず。（唯信鈔）

●安樂淨土をねがひつゝ、他力の信を得ぬひとは、佛智不思議をうたがひて、邊地懈慢にとまるなり（和讃）

●衆生有礙のさとりにて、無礙の佛智をうたがへば曾婆羅頻陀羅地獄にて、多劫衆苦にしづむなり。（和讃）

●大聖易往とゝきたまふ、淨土を疑ふ衆生をば、無限人とぞなづけたる、無耳人とぞのべたまふ。

無宿善の機の故に信じ難し

●憍慢と弊と懈怠とは、以て此法を信じ難し。（和讃）

●邪見と憍慢と惡の衆生、信樂受持すること甚だ以て難し、難の中の難斯に過ぐるはなし。（無量壽經）

●それ慢心は聖道の諸敎にさらはれ、佛道を妨ぐる魔とこれをのべたり、驕慢の自心をもて佛智をはからんと擬する、不覺鈍機の器としては、さらに佛智無上の他力をきゝ得べからざれば、祖師の御本所をば蔑如し、自建立の私の在所をば本所と自稱する程の、冥加を存せず利益を思はざるやから、大憍慢の妄情をもては、誠にいかでか佛智無上の他力を受持せんや、以て斯法を信じ難しの御釋、いよ〳〵思ひあはせられて嚴重なるものか（改邪鈔）

●されば、いかに昔より、當門徒にその名をかけたる人なりとも、無宿善の機は信心とゝりがたし、まことに宿善開發の機はおのづから信を決定すべし（御文）

◉謗法罪は、また佛法を信ぜる心のなきより、起るものなれば、もとよりそのうつはものにあらぜ、もし改悔せばむまるべきものなり。（口傳鈔）

◉誹謗正法のものは彌陀の本願に除却せり、誰かこれを恐れざらんや、しかのみならぜ、善導和尚は他の有縁の教行を輕毀して、自の有縁の要法を讃することをえされ、卽ちこれ自ら諸佛の法眼をわひ破壞するなり、法眼すでに滅しなば、菩提の正道履足するに由なし、淨土の門なんぞよく入ることを得んと誡められたり。（破邪顯正鈔）

常途の教に泥む故に信じ難し

◉菩提をうましき人はみな、專修念佛にあたをなす頓教毀滅のしるしには、生死の大海きはもなし。（和讃）

◉律宗の祖師元照の云く、況や我が佛の大慈淨土を開示して、ねんごろに徧く諸の大乘を勸喩したまへり、目に見、耳に聞て、特に疑謗を生じて、自ら甘なふて沈溺して超昇を慕はぜ、如來說て憐憫むべき者のためにしたまへり、良に此の法の特り常途に異ることを知らざるに由りてなり、賢愚をえらばぜ、緇素をえばらぜ、修行の久近を論せ

ぜ、造罪の重輕を問はぜ、但だ決定の信心ならしめよ、即ちこれ往生の因種なり。（教行證文類）

◎不如實修行といへること、鸞師釋してのたまはく一者信心淳からぜ、若存若亡するゆへに、二者信心一ならぜ、決定なきゆへなれば、三者信心相續せぜ、餘念間故とのべたまふ、三信展轉相成ぜ行者こゝろをとゞむべし、信心あつからざるゆへに、決定の信なかりけり、決定の信なきゆへに、念相續せざるなり、念相續せざるゆへ、決定の信をえざるなり、決定の信をえざるゆへ、信心不淳

とのべたまふ。（和讃）

（附）方便門の信と行

◎設ひ我れ佛を得むに、十方衆生、菩提心を發し、諸の功德を修して、心を至し願を發して我國に生れんと欲はん、壽終る時に臨んで、大衆と圍繞して其人の前に現せずんば、正覺を取らじ。（無量壽經）

◎其上輩者と云は、家を捨て欲をすて、沙門となり菩提心を發し、一向に專ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して彼國に生れんと願ぜん。

其中輩者といふは、十方世界の諸天人民、それ心を至して彼國に生れんと願ぜることわらん、行し沙門となり大に功德を修すること能はざと雖も當に無上菩提の心を發し、一向に專ら無量壽佛を念じ、多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繒をかけ燈をともし、華を散し香をたきて、此を以て廻向して彼國に生れんと願せん。

其下輩者といふは、十方世界の諸天人民、それ心を至して彼國に生れんと欲せんことわらん、たとひ諸の功德を作ること能はざれども、當に無上菩提の心を發して、一向に意を專にして乃至十念、無量壽佛を念じて、其國に生れんと願ぜ、もし深法を聞きて歡喜信樂せん、疑惑を生ぜざ、乃至一念彼佛を念じて、至誠心をもて其國に生れんと願せん。

（無量壽經）

●方便の願を按するに、假あり眞あり、亦行あり信あり、願とは卽ち是れ臨終現前の願なり、行とは卽ちこれ修諸功德の善なり、信とは卽ち是れ至心發願欲生の心なり、此願の行信に依て、淨土の

要門方便權假を顯開す、此要門より正助雜の三行を出す、此正助の中に就て、專修あり雜修あり。

（教行證文類）

●凡そ淨土の一切諸行に於て、綽和尚は萬行と云ひ、導和尚は雜行と稱し、感禪師は諸行といふ、經家によりて師釋をひらくに、雜行の中の雜行雜心、雜行專心、專行雜心、亦正行の中の專修專心、專修雜心、雜修雜心これ皆邊地胎宮、懈慢界の業因なり。

（教行證文類）

●觀經往生といふは、修諸功德の願により、至心發願のちかひによりて、萬善諸行の自善を廻向して、淨土を忻慕はしむるなり、しかれば無量壽佛觀經には、定善、散善、三福、九品の諸善あるひは自力稱名の念佛をときて、九品往生をすゝめしめたまへり、これは他力の中に自力を宗致としたまへり。

（三經往生文類）

●諸行往生といふは、或は父母に孝養し、或は師長に奉事し、或は五戒八戒をたもち、或は布施忍辱を行じ、乃至三密一乘の行をめぐらして、淨土に往生せんとねがふなり、これみな往生をとげる

にあらぎ、一切の行はみなこれ淨土の行なるが故にたゝ、又これは自の行をはげみて往生をねがふゆへに、自力の往生となづく。（唯信鈔）

●自力とまふすことは、行者のおの〳〵の縁にしたがいて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して我身をたのみ、我計ひの心をもて、身口意のみだれ心をつくろひ、めでたうしなして、淨土へ往生せんと思ふを自力とまふすなり。（末燈鈔）

●至心發願欲生と、十方衆生を方便し、衆善の假門ひらきてぞ、現其人前と願じける。（和讃）

●釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修をすゝめしむ。（和讃）

●こゝろは一にあらねども、雜行雜修これにたり、淨土の行にあらぬをば、ひとへに雜行となつけたり。（和讃）

●設ひ我佛を得むに、十方の衆生、我名號を聞て、念を我國にかけて、諸の德本を植へて、心を至し廻向して我國に生れんと欲はんに、果遂せぞんば正覺を取らじ。（無量壽經）

◎此諸智に於て疑惑して信せざ、然に猶ほ罪福を信じて、善本を修習して其國に生れんと願せん、此の諸〳〵の衆生彼の宮殿に生ると。（無量壽經）

◎佛阿難に告たまはく、汝よく是の語を持て、この語を持てといふは、卽ちこれ無量壽佛の名を持てとなり。（觀無量壽經）

◎少善根福德の因緣を以て彼國に生ることを得べからざ、阿彌陀佛を說くを聞て、名號を執持せよ（阿彌陀經）

◎彌陀經往生といふは、植諸德本の誓願によりて、不果遂者の眞門に入り、善本德本の名號をえらひて、萬善諸行の少善をさしをく、然りと雖も定散自力の行人は、不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號を已が善根として自ら淨土に廻向して、果遂の誓をたのむ。（三經往生文類）

◎今方便眞門の誓願に就て、行あり信あり、亦眞實あり方便あり、願とは卽ち植諸德本の願これなり行とはこれに二種あり、一には善本、二には德本なり、信とは卽ち至心廻向欲生の心是なり。（敎行證文類）

◎眞門の方便に就て、善本あり德本あり、復定專心あり、復散專心あり、復定散雜心あり、雜心とは大小凡聖一切善惡各々助正間雜の心を以て名號を稱念す、良に教は頓にして根は漸機なり、行は專にして心は間雜す、故に雜心と曰ふ、定散の專心とは、罪福を信ぜる心を以て本願力を願求す、これを自力の專心を名く。（敎行證文類）

◎自の計ひをさしはさみて、善惡の二につきて、往生のたすけ、さはり二た樣に思ふは、誓願の不思議をばたのまずして、我心に往生の業をはげみて申す所の念佛をも自行になすなり、この人は名號の不思議をも亦信せざるなり、信ぜざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願の故に遂に報土に生ずるは、名號不思議の力なり、これすなはち誓願不思議の故なれば唯一つなり。（歎異鈔）

◎至心廻向欲生と十方衆生を方便し、名號の眞門ひらきてぞ、不果遂者と願じける。（和讃）

◎如來の諸智を疑惑して、信ぜずながらなをもまた罪福ふかく信ぜしめ、善本修習すぐれたり。

●助正ならべて修するをば、すなはち雜修となづけたり。（和讃）

●佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらはるゝ（和讃）

第三節　利益

第一項　現在の利益

（一）現益の意義

●煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を得れば、即の時に大乘正定聚の數に入る（教行證文類）

●設ひ我佛を得むに、國中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじ。（無量壽經）

●信心をえたるひとは、必ず正定聚の位に住するが故に、等正覺の位と申すなり。（末燈鈔）

●問ていはく、正定と滅度とは一益とこゝろうべきか、また二益とこゝろうべきや、答ていはく、一念發起のかたは正定聚なり、これは穢土の益なり、つぎに滅度は淨土にてうべき益にてあるな

正定聚の位に住す

正定聚の位は現生の益なり

獲信の人は平生の時に往生の業事成辨す

りと心得べきなり。

（御文）

念佛往生には臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の歸命の一心、他力より定まるとき、即得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて聞持する平生のときざみに治定するわひた、この穢体亡失せずといへども、業事成辨すれば体失せずして往生すといはるゝ歟、本願の文あきらかなり。

（口傳鈔）

如來より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず、たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし、この眞實信心

獲信は心命の終なり

をえんとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚の位に定まるとみへたり。

（尊號眞像銘文）

往生の心行を獲得すれば、終焉にさきだちて、即得往生の義あるべし、たとへば身心の二に命終の道理あひ分るべきか、無始よりこのかた、生死に輪廻して出離を悕求しならひたる迷情の自力心、本願の道理をきくところにて、誹謗すれば心命つくるときにてあらざるや、そのとき攝取不捨の益にもあづかり、住正定聚の位にも定れば、これを即得往生といふべし、善惡の生處をさたむるこ

獲信者は如來と等し

とは、心命のつくる時なり、心命のときにあらざるしかれば臨終を期すべからざる義、道理文證明けし。

（最要鈔）

●彌勒はすでに佛にちかくましませば、彌勒佛と諸宗のならひはまふすなり、然れば彌勒に同じ位なれば、正定聚の人は如來と等しとも申すなり、淨土の眞實信心の人は、この身こそわさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來と等しければ如來とひとしと申すこともわるべしとしらせたまへ。

（末燈鈔）

宗祖は獲信者には十種の益ありと云へり

獲信の人は

●金剛の眞心を獲得する者は、横に五趣八難の道を超へ、必ず現生に十種の益を獲るなり、何ものか十とする、一には冥衆護持の益、二には至德具足の益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり。

（教行證文類）

（二）

正定聚の益

●煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心

正定聚の位に住す

行を獲れは、卽の時に大乘正定聚の數に入る（教行證文類）

●其れ衆生ありて、彼國に生るゝ者は、皆悉く正定の聚に住す、所以は何んとなれば、彼の佛國中には諸の邪聚及び不定聚なればなりと。（無量壽經）

●若し人、我を念し名を稱して自ら歸すれば、卽ち必定に入る。（易行品）

●若不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり一念慶喜する人は、往生かならさだまりぬ。

●安樂國をねがふ人、正定聚にこそ住すなれ、邪定不定聚くにゝなし、諸佛讃嘆したまへり。（和讃）

●たとひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、佛の御名をきく人は、ながく不退にかなふなり。（和讃）

●眞實信心うるひとは、卽ち定聚の數に入る。（和讃）

●問て云く、念佛の行者一念の信心定るとき、或は正定聚に住すといひ、或は不退轉をうといふこ

と甚だ思ひ難し、其故は正定聚といふは、無上の佛果に至るべき位に定まるなり、不退轉と云は永く生死にかへらざる義を顯す言なり、其言異なりと雖其意同じかるべし、是皆淨土に生れて受る位なり、然れば卽得往生住不退轉といへるも、淨土にしてうべき益なりとみへたり、いかてか穢土にしてたやすく此位に住すといふべきや、答て云く、土につき機につきて退不退を論せん時は、誠に穢土の凡夫不退にかなふといふことあるべからず、淨土は不退なり、穢土は有體なり、菩薩の

位に於て不退を論ぜ、凡夫は皆退位なり、然るに薄地底下の凡夫なれども、彌陀の名號をたもちて金剛の信心をおこせば、横ざまに三界流轉の報を離る故に、其義不退を得るにあたれるなり、是卽ち菩薩の位に於て論ずるところの、位行念の三不退等にはあらず、今云ふ所の不退といふは、これ心不退なり、されば善導和尚の往生禮讃には、光觸を蒙ふる者は心不退と釋せり、但し卽得往生住不退轉といへるは、淨土に往生して不退をうべき義を遮せんとにはあらず、まさしく往生のゝち三不

退をも得、處不退にもかなはんことは然なり、處々の經釋其意なきにあらぜ、與奪の心あるべきなり、然りと雖今卽得往生住不退轉といへる本意は證得往生、現生不退の密益をときあらはすなり、是を以て我流の極致とするなり、故に聖人教行證の文類の中に處々に此義をのべたまへり、註論の上卷に但だ信佛の因緣をもて、淨土に生れんと願ぜれば、佛の願力に乘じて便ち彼淸淨の土に往生を得、佛力住持して卽ち大乘正定の聚に入るといへる文是なり、是も文の顯說は淨土に生れて後、正定聚に住する義をとくに似たりと雖も、そこには願生の信を生ぜるとき、不退にかなふことをあらはすなり、何を以てか知るとならは、此註論の釋は彼十住毘婆娑論の意を以て釋するが故に、本願のこゝろ現身の益なりとみゆる上は、今の釋も彼に違ふべからぜ、聖人深く此意を得たまひて、信心をうる時、正定の位に住する義をひき釋したまへり、又文類の第三に領解の心中を述たまふとして、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ば

ぜ、眞證の證に近くことを快まぜといへり、是卽ち定聚の數に入ることをば現生の益なりとえて、之を喜ばずと我心をはちしめ、眞證のさとりをば生後の果なりとえて、之に近くことを快ますと悲みたまふなり。

（眞要鈔）

● 一念歸命の時不退の位に住す、これ不退の密益なり、是れ涅槃分なる由仰せられ候と云々。

（御一代記聞書）

● 彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に卽の時必定に入る。

（正信念佛偈）

● 能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷ぜぜして涅槃を得。

（正信念佛偈）

● 惑染の凡夫信心發れば、生死卽ち涅槃と證知す。

（正信念佛偈）

● 正定聚不退のくらゐに住すとなり、これによりて煩惱を斷ぜぜして、涅槃をうといへるは、この心なり。

（御文）

● この信をゑたる位を、經には卽得往生住不退轉と〻く。

（御文）

● 卽得往生といふは、卽はすなはちといふ、時をへ

平生の一念によりて往生の得否は

ぞ、日をもへたてぬなり、又即はつくといふ、その位に定まりつくといふ、得はうべきことをえたりといふ眞實信心をうれば、すなはち無碍光佛の御心の中に、攝取してすてたまはざるなり、攝はおさめたまふ、取はむかへるとまうすなり、おさめとりたまふときは、即ち日をもへだてぞ、正定聚の位につき定るを、往生をうとはのたまへるなり。

（一念多念證文）

●如來より御誓をたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからぞ、たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし、この眞實信心をえんとき攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚の位に定まるとみへたり。

（尊號眞像銘文）

定まる

●涅槃の眞因たる信心の根芽、僅にきざすとき、報土得生の定聚のくらゐに住す。

（口傳鈔）

●念佛往生には臨終の善惡を沙汰せぞ、至心信樂の歸命の一心、他力よりさだまるとき、即得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて聞持する、平生のきざみに治定するゆひだ、この穢体亡失せぞといへども、業事成辨すれば、體失せぞして往生す

といはるゝ歟。

（口傳鈔）

●されば眞宗の肝要、一念往生をもて淵源とす、そのゆへは願成就の文、光明寺の御釋等の文證みな無常の根機を本とする故に、一念をもて往生治定の時刻と定めて、命のぶれば自然と多念に及ぶ道理をあかせり、一念無上の佛智をもて凡夫往生の極促とし、一形憶念の名願をもて、佛恩報盡の經營とすべしとつたうるものなり。（口傳鈔）

●まさしく願成就したまふには、其名號を聞て、信心歡喜し乃至一念せんと說けり、この文につい

て、凡夫往生の得否は乃至一念發起の時分なり。

（改邪鈔）

●根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり、行業をろそかなりとて疑ふべからず、經に乃至一念の文あり、佛語に虛妄なし、本願わにあやまりあらんや、名號を正定業となつくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしく定まる故なり、若し彌陀の名願力を稱念すとも、往生なを不定ならば、正定業とは名くべからず、我已に本願の名號を持念す、往生の

業すでに成辨することをよろこぶべし、平生の一念によりて、往生の得否はさだまれるものなり、平生の時不定のおもひに住せば、かなふべからぜ平生のとき善知識の言の下に、歸命の一念を發得せば、その時をもて娑婆のをはり臨終とおもふべし、また殺生罪をつくるとき、地獄の定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄に必ぜおつべし、念佛も亦かくのごとし、本願を信じ名號をとなふれば、その時分にわたりて必ぜ往生は定るなりとしるべし。

◎一流に於ては平生業成の義にして、臨終往生のゝぞみを本とせぜ。（執持鈔）

◎善人は三福を行ぜべし、悪人はこれを行ぜべからざるがゆへに、それがために十念の往生をとくと心えられたり、然るにこの悪人のなかに、又長命短命の二類あるべし、長命のためには十念をあたふ、至極短命の機のためには、一念の利生を成就すとなり、これ他力のなかの他力、易行のなかの易行をあらはすなり、一念の信心定まる時往生を（眞要鈔）

證得せんこと、これその證なり。（眞要鈔）

◎如來の大悲短命の根機を本としたまへり、もしまた念をもて本願とせば、いのち一刹那につゞまる無常迅速の機、いかでか本願に乘ぜべき。（口傳鈔）

◎是卽ち不來迎の談、平生業成の義なり。（御文）

獲信は卽ち心命の終なり

◎予が安心の一途、一念發起平生業成の宗旨にをいては、いま一定のあひだ、佛恩報盡の稱名は行住座臥にわすれざること間斷なし。（御文）

◎往生の心行を獲得すれば、終焉にさきだちて卽得往生の義あるべし、假令身心の二に命終の道理あひ分るべき歟、無始よりこのかた、生死に輪廻して出離を悕求し、ならひたる迷情の自力心、本願の道理をきくところにて、謙敬すれば心命つくるときにてあらざるや、その時攝取不捨の益にもあづかり、住正定聚の位にも定まれば、これを卽得往生といふべし、善惡の生處を定むることは心命のつくる時なり、身命の時にわらぜ、然れば臨終を期すべからざる義、道理文證明けし。（最要鈔）

◎平生の時、善知識の言のしたに、歸命の一念を發

得せば、その時を以て娑婆の終、臨終とをもふべし。

（執持鈔）

●しかればすなはち今云ふ處の往生といふは、あながちに命終のときにあらず、無始已來輪轉六道の妄業、一念南無阿彌陀佛と歸命する、佛智無生の名願力にほろぼされて、涅槃畢竟の眞因はじめてきざすところをさすなり、されば一念歸命の解了たつとき、往生やがて定まるとなり、うるといふは定る心なり。

（眞要鈔）

●本願を信受するは前念命終なり、即ち正定聚の數に入るの文）即得往生は後念即生なり（即の時に必定に入るの文なり）

（愚禿鈔）

●法を聞きて能く忘れず、見て敬ひ、得て大きに慶べば、則ち我が善き親友なり。

（無量壽經）

●もし念佛するものは、當に知るべし、此人はこれ人中の分陀利華なり。

（觀無量壽經）

●もし念佛のひとは即ちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上々人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。

（散善義）

●彌勒にひとしとも申すなり。

（御文）

獲信の人の別名

◎彌勒はすでに佛にちかくましませば、彌勒佛と諸宗のならひはまふすなり、然れば彌勒に同じ位なれば、正定聚の人は如來とひとしとも申すなり

浄土の眞實信心の人は、この身こそ、わさましさ不浄造悪の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしとまうすことも、あるべしとしらせたまへ。

（末燈鈔）

◎華嚴經にいはく、信心歡喜の者は諸の如來と等し。

（教行證文類）

◎信心よろこぶその人を如來とひとしと、きたまふ

眞宗念佛きゝえつゝ、一念無疑なるをこそ、希有最勝人とほめ、正念をうとはさだめたれ。

他力の信をうる人を、うやまひおほきによろこべば、すなはち我が親友ぞと、教主世尊はほめたまふ。

（和讃）

（三）心多歡喜の益

◎大經にのたまはく、諸有衆生、其名號を聞きて、信心歡喜し乃至一念せん、至心に廻向せしめたまへり、彼國に生ると願ぜれば、即ち往生を得、不退轉に住せむと、又他方佛國の所有衆生、無量壽

獲信の人は心に歡喜多し

如來の名號をきゝて、能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せんとのたまへり。（教行證文類）

●眞實の行信をうる者は、心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名く。（教行證文類）

●報土往生の他力不思議の信心を、善知識ありて、つたへときてさづくるを、行者きゝうるによりて文のごとく一念歡喜のおもひ起るにつきて、往生たちどころにさだまるを、正定聚のくらゐに住すともいひ、必ず滅度に至るともいひ、攝取不捨の益にあづかる時ともいふなり。（末願鈔）

歡喜には未來往生疑なしといふ未樂しく喜ぶ義あり

●信心は如來の御誓をきゝて疑ふ心のなきなり、歡喜といふは、歡は身をよろこばしむるなり、喜は心によろこばしむるなり、得べきことをえてんぜと、かねて先よりよろこぶ心なり。（一念多念證文）

●信心歡喜といふは、すなはち信心さだまりぬれば淨土の往生は疑なく思ふてよろこぶ心なり。（御文）

●十方諸有の衆生は、阿彌陀至德の御名をきゝ、眞實信心いたりなば、おほきに所聞を慶喜せん。（和讃）

慶喜には往生は一定なりといふ安堵の喜の義あり

◎この信心をうるを慶喜といふ、慶喜する人は諸佛に等しき人と名く、慶は得べきことをえて後によろこぶ心なり、信心をえて後によろこぶ心なり、喜は心の中に常に喜ぶ心絶へざして、憶念つねなるなり、踊躍するなり。

（唯信文意）

◎慶喜とまうし候事は、他力の信心を得て、往生を一定して、むざとよろこぶ心を申すなり。

（一念多念證文）

◎往生の定まるしるしには、慶喜の心起るなり。

（見聞集）

歡喜と煩惱

◎歡喜踊躍乃至一念といふは、歡喜はうべきことをえてんぞと、さきだちてかねてよろこぶこゝろなり、踊は天にをどるといふ、躍は地にをどるといふ、よろこぶ心の極りなき形なり、慶樂するありさまをあらはすなり、慶はうべきことをえてのちによろこぶ心なり、樂はたのしむ心なり、之は正定聚の位をうるかたちをあらはすなり。

（一念多念證文）

◎念佛申し候へども、踊躍歡喜の心をろそかに候事又急ぎ淨土に參り度心の候はぬは、いかにと候

べき事にて候やらんと申し入れて候ひしかば、親鸞も此不審ありつるに、唯圓坊同じ心にてありけり、よく〳〵案じみれば、天に踊り地に躍る程に喜ぶべきことを、よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定と思ひたまふべきなり、喜ぶべき心をおさへて喜せざるは煩惱の所爲なり、然るに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は是の如きの我等がためなりけりとしられて、いよ〳〵樂しく覺ゆるなり、又淨土へ急ぎ參り度心のなくて、いさゝか所

勞の事もあれば、死なんぞるやらんと心細く覺ゆることども、煩惱の所爲なり、久遠劫より今まで流轉する苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の淨土は戀しからぬ候こと、誠によく煩惱の興盛に候こそ、なごりおしく思へども、娑婆の緣つきて力なくして終るときに、かの土へは參るべきなり、急ぎ參り度心なきものを特に憐れみたまふなり、これにつきてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知候へ、踊躍歡喜の心もあり、急ぎ淨土へ參り度候はんには、煩惱

のなさやらんとおやしく候ひなまじと云々。

（歎異鈔）

（四）　心光攝護の益

獲信の人は佛の心光によりて攝護せらる。

●彌陀の身色は金山の如し、相好の光明は十方を照す、唯念佛のものゝみありて光攝を蒙る、當に知るべし、本願最も強しとす。（往生禮讚）

●たゞ阿彌陀佛を專念する衆生のみありて、彼の佛の心光常にこの人を照して、攝護して捨てたまはぜ、すべて、餘の雜業の行者を照攝することを論せぜ。（觀念法門）

●金剛堅固の信心の、定まる時をまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、なかく生死をへだてける。（和讚）

●彌陀の本願信ずべし、本願信ぜる人はみな、攝取不捨の利益にて、無上覺をばさとるなり。（和讚）

●彌陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんと思立つ心の起るとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。（歎異鈔）

◉眞實信心には必ず名號を具すといふは、本願の起りを善知識の口より聞きうるとき、彌陀の心光に攝取せられ奉まつりぬれば、攝取の力にて名號自ら稱へらるゝなり、是卽ち佛恩報謝のつとめなり

（永願鈔）

◉光の中におさめをきましくゝて、極樂へ往生せしむべきなり、是を念佛衆生を攝取し給ふと云事なり。

（御文）

◉佛の心光かの一念歸命の信心の行者を攝取したまふ。

（御文）

佛の心光は見たてまつらずと雖も常に我を照し給ふ

◉煩惱に眼さへられて、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、常に我身をてらすなり

（和讃）

◉攝取の心光は常に照護して己によく無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋惛の雲霧常に眞實信心の天に覆へり、譬ば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明にして闇なきが如し。

（正信念佛偈）

◉我亦かの攝取の中にあれども、煩惱に眼をさへて見たてまつらずと雖も、大悲倦きことなくして、常に我をてらしたまふ。

（正信念佛偈）

眞實信心の人は攝取して捨てたまはざるが故に來迎を期すべきにあらず

●されば信心をうるとき、攝取の益にあづかるが故に正定聚に住す、然れば三毒の煩惱はしばらく起れども、まことの信心はかれにもさへられぎ、顚倒の妄念は常にたへざれども、更に未來の惡報をば招かぎ、故にもしは平生、もしは臨終、たゞ信心の起るとき、往生は定まるぎとなり、之を正定聚に住すともいひ、不退の位に入るともなつくるなり、この故に聖人又のたまはく、來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるが故に、臨終まつこと、來迎たのむことは、諸行往生の人にいふぺし、眞實信心の行人は、攝取不捨の故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ぎ滅度に至るが故に大涅槃を證するなり、故に臨終まつことなし、來迎たのむことなしといへり、これらの釋にまかせば、眞實信心の人、一向專念のともがら、臨終をまつぺからぎ、來迎を期すべからぎといふこと、其旨明なるものなり。（眞要鈔）

●聖人の御意を伺がふに、念佛の行者の往生をうといふは、化佛の來迎にあづからぎ、もしあづかるといふは、報佛の來迎なり、これ攝取不捨の益な

獲信の人は無上の功德を得

り。

(五) 至德具足の益

(眞要鈔)

●それ彼佛の名號を聞くことを得ぎ、歡喜踊躍して乃至一念することあらん、當に知るべし、此人は大利を得とす、則是れ無上の功德を具足するなり

(無量壽經)

●佛の本願力を觀ぎるに、過て空しく過ぐるものなし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ。

(淨土論)

●もし衆生ありて、一念意を作して如來を緣する者は、得る所の功德、限極あることなし、稱量すべからぎ。

(往生要集)

●金剛心の人は、知らぎ求めざるに、功德の大寶その身にみちみつるが故に、大寶海と喩へたるなり

(一念多念證文)

●本願力にあひぬれば、空しく過ぐる人ぞなき、功德の寶海みちくて、煩惱の濁水へたてなし。

(和讃)

●五濁惡世の衆生の、選擇本願信ぎれは、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてり。

（六）　轉惡成善の益

（和讃）

●しかれば大悲の願船に乘して、光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜かに衆禍の波轉ぜ、卽ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を證し、普賢の德に遵がふなり。

（教行證文類）

●爾ればこれ等の覺悟は、皆安養淨刹の大利、佛願難思の至德なり、海と言は、久遠より已來、凡聖の修する所の雜修雜善の川水を轉し、逆謗闡提恒沙無明の海水を轉じて、本願大悲知慧眞實恒沙萬德の大寶海と成す、之を海の如しと喩ふるなり、良とに知りぬ、經に說て煩惱の氷解けて功德の水と成ると言へるが如し。

（教行證文類）

●譬へは淨摩尼珠、之を濁水に置けば、水卽ち清淨なるがごとし、もし人無量生死の罪濁ありと雖も彼阿彌陀如來の至極無生、清淨寶珠の名號を聞きて、之を濁心に投ぜれば、念々の中に罪滅し心淨くして、卽ち往生を得。

（往生論註）

●此一念歸命の信心は、凡夫自力の迷心にあらぜ、

如來清淨本願の智心なり、然れば二河の譬喩の中にも、中間の白道をもて、一處には如來の願力にたとへ、一處には行者の信心にたとへたり、如來の願力にたとふといふは、念々遺ることなく、彼の願力の道に乘ぜといへる之なり、心は貪瞋の煩惱にかゝはらぜ、かの彌陀如來の願力の白道に乘せよとなり、行者の信心にたとふといふは、衆生貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ぜといへるこれなり、心は貪瞋、煩惱の中によく清淨願往生の心を生ぜとなり、されば水火の二河は衆生の貪瞋なり、これ不淨の心なり、中間の白道は、或時は行者の信心といはれ、或時は如來の願力の道と釋せらる、これ即ち行者の起すところの信心と、如來の願心と一つなることをあらはすなり、隨ひて清淨の心といへるも、如來の智心なりとあらはすこゝろなり、もし凡夫我執の心ならば清淨の心とは釋すべからぜ、この故に經には諸の衆生をして功德成就せしめたまへりといへり、そのことはりをきゝて、一念解了の心おこれば、佛心と凡心と全く一になるなり。

一、衆生をしつらひたまふ、しつらふといふは、衆生の心をそのまゝをきて、よき心を御加へ候ひて、よくめされ候、衆生の心をみなとりかへて佛智はかりにて、別に御みたて候ことにてはなく候。（眞要鈔）

一念歸命の信心を起せば、まことに宿善の開發にもよほされて、佛智より他力の信心をあたへたまふが故に、佛心と凡心と一になるところをさして信心獲得の行者とはいふなり。（御文）

されば一念も本願を疑ふ心なければ、かたしけなくもその心を如來のよくしろしめして、すでに行者のわろき心を如來のよき御心と同しものになしたまふなり、このいはれをもて、佛心と凡心と一体になるといへるはこの心なり。（御文）

自はおのづからといふ、おのづからといふは、自然といふ、自然といふは、しからしむるといふ、しからしむるといふは、行者のはじめて、ともかくもはからはざるに、過去今生未來の一切の罪を善にかへなすといふなり、轉すといふは、罪をけ

し失なはざして善になすなり、よろづの水大海に入れば即ちうしほとなるがごとし。（唯信鈔銘文）

（七）　他力の廻向

入正定聚の廻向

◎煩惱を斷せずして涅槃を得といふは、願力の不思議なるが故に、我身には煩惱を斷ぜざれども、佛のかたよりは、遂に涅槃に至るべき分に定まるものなり。（正信偈大意）

◎然れば凡夫不成の迷情に、合諸衆生の佛智滿入して、不成の迷心を他力より成就して、願入彌陀界の往生の正業成ぜるときを、能發一念喜愛心と

功德の廻向

も、煩惱を斷ぜざして涅槃を得とも、正定聚の數に入るとも、不退轉に住すとも、聖人釋しましませり、これ即ち即得往生の時分なり。（改邪鈔）

◎歸命といふは、彌陀を一念たのみまいらする心なり、又發願廻向といふは、たのむ機にやがて大善大功德をあたへたまふなり。（御一代記聞書）

◎阿彌陀如來その衆生をしろしめして、萬善萬行恒沙の功德をさづけたまふ。（御文）

◎一念に彌陀をたのむ衆生に、無上大利の功德をあ

攝取の廻向

第十九願の機は臨終に佛菩薩來迎の益なり

たへたまふを、發願廻向とは申すなり。（御文）

遍照の光明を放て行者を攝取したまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛の四字の心なり、又發願廻向のこゝろなり。（御文）

また發願廻向といふは、たのむところの衆生を攝取してすくひたまふこゝろなり。（御文）

（附）方便門の現益

其上輩といふは、これ等の衆生、壽終らん時にのぞんで、無量壽佛と諸の大衆と、其人の前に現せん。

其中輩といふは、其人終に臨んで、無量壽佛其身を化現せん、光明相好つぶさに眞佛の如くならん、諸の大衆を其人の前に現せん。

其下輩といふは、此人終に臨んで、夢の如く彼佛を見たてまつりて亦往生を得。（無量壽經）

彼國に生ずる時、此人精進勇猛なるが故に、阿彌陀如來、觀世音、大勢至、無數の化佛、百千の比丘、聲聞大衆、無數の諸天、七寶の宮殿と、觀世音菩薩金剛臺をとりて、大勢至菩薩とともに行者の前に至る、阿彌陀佛大光明を放ちて、行者の

身を照したまふ、諸〻の菩薩と手を授けて迎接す
觀世音大勢至、無數の菩薩と、行者を讃歎して、
其心を勸進す、行者見をはりて歡喜踊躍す、自ら
其身を見れば、金剛臺に乘じて、佛後に隨從して
彈指のあひだの如くに彼國に往生す。

（觀無量壽經）

❹阿陀彌佛を說くを聞て、名號を執持すること、若し
は一日、若は二日、若は三日、若は四日、若は五
日、若は六日、若は七日、一心にして亂れざれば
其人命終の時に臨みて、阿彌陀佛諸〻の聖衆と現

して、其前に在ます、この人終らん時、心顚倒
せずして即ち往生することを得ん。

（阿彌陀經）

❺終に臨み、聖衆自ら來迎す、行者佛を見たてま
つり、心に歡喜す、彌陀手を接したまひて華臺に
坐す。

（法事讃）

❻來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるが故に
臨終といふことは、諸行往生の人に云ふべし、
未だ眞實の信心を得ざるが故なり、又十惡五逆の
罪人の、はじめて善知識にあふて、すゝめらるゝ
ときにいふことなり、眞實信心の行人は、攝取不

捨のゆへに、正定聚の位に住す、この故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし、信心の定まる時、往生亦定まるなり、來迎の儀則をまたぞ、自力の行人は來迎をまたぞしては、邊地胎生、懈慢界までも生るべからぞ、この故に第十九の誓願に、諸の善をして淨土に廻向して、往生せんと願ふ人の臨終には、我現じて迎へんと、誓ひたまへり、臨終まつことゝ來迎往生といふことは、この定心散心の行者の云ことなり。（末燈鈔）

●不來迎のことも、一念發起住正定聚と沙汰せられ候ときは、更に來迎を期し候べきこともなきなり、其故は來迎を期するなんと申すことは、諸行の機にとりてのことなり、眞實信心の行者は一念發起するところにて、やがて攝取不捨の光益にあづかるときは、來迎までもなきなり。（御文）

罪障消滅の益

●下品上生といふは或は衆生ありて、衆の惡業を作れり、命終らんと欲する時に、善知識のために大乘十二部經首題の名字を讃むるに遇はん、是の如きの諸經の名を聞くを以ての故に、千劫も極重

の惡業を除卻く、智者復教へて、合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に、五十億劫の生死の罪を除く。

下品下生といふは、命終の時に臨みて、心を至して聲をして絶へざらしめて、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に、念々の中に於て、八十億劫の生死の罪を除く。

（觀無量壽經）

◎善男子善女人、阿彌陀佛を說くを聞きて、一心にして亂れざ、專ら名號を稱せよ、稱名を以ての故に諸罪消滅す、卽ちこれ多功德多善根多福德の因緣なりと。

（敎行證文類）

獲信の人は臨終一念の夕べ彌陀の淨國に往生す

第一項　未來の利益　當益の意義

（一）

◎謹んで眞實證を顯はさば、則ち是れ利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果なり、卽ち是れ必至滅度の願より出たり、然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、卽の時に大乘正定聚の數に入る、正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。

（敎行證文類）

●大經往生といふは、如來選擇の本願、不可思議の願海これを他力とまふす、これ即ち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり、現生に正定聚の位に住して、必ず眞實報土にいたるこれは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるが故に、無上涅槃のさとりをひらく、これを大經の宗致とす、この故に大經往生と申す、又難思議往生と申すなり。

（三經往生文類）

●眞實の證といふは、さきの行信によりて、うるところの果、ひらくところのさとりなり、これ即ち

極樂は無爲涅槃界なるが故に往生

第十一の必至滅度の願にこたへてうる處の妙悟なり、これを常樂ともいひ、涅槃ともいひ、法身ともいひ、實相ともいへる、みなこのさとりをうる名なり、諸の聖道門の諸經の心は、父母所生の身をもて、かの深きさとりをこゝにて開かんと願ふなり、今淨土門の心は、彌陀の佛智に乘して法性の土に到りぬれば、自然にこのさとりにかなふとひふなり、此土の得道と他土の得證と異りと雖も得る處の證は唯一つなりと知るべし、されば往生するや否や無生の理に契ひ大涅槃を證す是を往生即成佛と云

といへるも、實には無生なり、この無生のことはりをは、安養にいたりてさとるべし、其位をさして眞實の證といふなり。

（教行信證大意）

◎無上大利の名號には、萬行ことごとくおさまり、彌陀無漏の果德は、五智をもて成ぜるが故に、この行をたもつものは、無智無行なれども、自力修習の智行にはすぐれ、この法を信ぜるものは造惡不善なれども、必墮地獄の苦報を免がる、されば まさしく淨土に生れて無爲の法性を證し、まのあたり佛前にまうでゝ、無生の深理をさとりなんのち、穢土の舊骨の佛の境界に同せしこと何の疑かあらん。

（最須敬重繪詞）

往生して涅槃を證すれば大悲を起して衆生を利益す

◎願土に至れば、速に無上涅槃を證してぞ、すなはち大悲を起すなり、これを廻向と名けたり。

（和讃）

◎さとり開くときを、法性のみやこへかへるとまふすなり、之を眞如實相を證すともいふ、無爲法身ともいふ、滅度にいたるともいふ、法性の常樂を證すともいふ、無上覺にいたるとも申すなり、このさとりをうれば、即ち大慈大悲きはまりて、生

極樂に往生する往相も衆生化益に出る還相も共に他力の廻向なり

死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを普賢の德に歸しせむるといふなり、この利益に赴くを來といふ。

（唯信鈔文意）

●いはんや佛法不思議の力、凡夫をして往生をとげしめんこと、之を疑ふべからず、滅罪の德あれば重罪の惡人なれども生死をはなれ、生善の德あれば、無善の凡夫なれども往生をうるなり、これを他力といふなり。

（顯名鈔）

●度衆生心といふことは、彌陀智願の廻向なり。

（和讃）

獲信の人は臨終の夕べには難思議往生をとぐ

●往相還相の二種の廻向は、凡夫としては更におこさゞるものなり、ことぐく如來の他力よりおこさしめられたり。

（御文）

（三）難思議往生

●大經往生といふは、如來選擇の本願、不可思議の願海、これを他力とまふす、これすなはち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり現生に正定聚の位に住して必ず眞實報土にいたる、これは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるが故に、無上涅槃のさとりをひらく、これを大經の宗

致とす、この故に大經往生とまうす、又難思議往生と申すなり。

●設ひ我佛を得むに、國の中の人天、定聚に住して必ず滅度に至らずば、正覺を取らじ。（無量壽經）

●其れ衆生ありて彼國に生るゝ者は、皆悉く正定の聚に住す、ゆへは何んとなれば、彼佛の國の中には、諸の邪聚及び不定聚なければなり。（無量壽經）

●必ず超絶して去ることを得て、安養國に往生せよ、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ、道に昇るに窮極なし。（無量壽經）

●若し人たゞ彼國土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ぜんものと、亦往生を得るものとは、即ち正定聚に入る、此は是れ國土の名字佛事をなす、いかんぞ思議すべけんや。（淨土論）

●彌陀の智願海は深廣にして涯底なし、名を聞て往生せんと欲せば、皆悉く彼國に到る。（往生禮讃）

●法門のついでに、口ずさみたまひける何にいはく名利は生死のきづな、三塗の鐵網にかゝる、稱名

は往生のつばさ、九品の蓮臺にのぼる。（古德傳）

一生惡を造れども、弘誓に値ひぬれば、安養界に至て妙果を證す。（正信念佛偈）

易行道といふは、曰くたゞ信佛の因緣をもて、淨土に生せんと願ずれば、佛の願力に乘じて、即ち彼の淸淨の土に往生することを得。（歩船鈔）

至心信樂の願を因として、等覺を成じ大涅槃を證することは、必至滅度の願成就したまへばなり（正信念佛偈）

今報土得生の機にあたへまします佛智の一念は、即ち佛因なり、かの佛因にひかれて、うるところの定聚の位、滅度にいたるといふは、即ち佛果なり、この佛因佛果においては、他力より成ぜれば更に凡夫の力にてみたすべきにあらぜ。（改邪鈔）

五十六億七千萬、彌勒菩薩はとしをへん、まことの信心うる人は、このたびさとりをひらくべし。（和讃）

念佛往生の願により、等正覺にいたる人、すなはち彌勒におなじくて、大般涅槃をさとるべし。（和讃）

●彌陀智願の廻向の、信樂まことにうる人は、攝取不捨の利益ゆへ、等正覺にいたるなり。（和讃）

●信は願より生ぜれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはぜ。（和讃）

●つみふかく、如來をたのむ身になれば、のりのちからに西へこそゆけ。（御文）

●すでに正定聚の數に住するが故、凡身をすてゝ佛身を證すといへる心を、すなはち阿彌陀如來とはまふすなり。（御文）

●されば無始已來、つくりとつくる惡業煩惱をのこるところもなく、願力不思議をもて消滅するいはれあるが故に、正定聚不退の位に住すとなり、これによりて煩惱を斷せぜして、涅槃をうといへるは、このこゝろなり。（御文）

●往生といふは、大經に言く、皆自然虛無の身無極の體を受く、論に曰く、如來淨華の聖衆は正覺の華より化生す、又云く、同一念佛にして別の道なし、又云く難思議往生と。（教行證文類）

（三）平等の證悟

●證と言は即ち利他圓滿の妙果なり、即ち是れ必至

極樂は無爲涅槃界なるが故に往生卽無生の理に契ふ

滅度の願より出たり、亦證大涅槃の願と名く、亦は往相證果の願と名くべし、卽ち是れ淸淨眞實至極畢竟無生なり。

（淨土文類聚鈔）

◉彼淨土の莊嚴功德成就を觀ぜるに、彼淨土は是れ阿彌陀如來淸淨本願無生の生にして、三有虛妄の生の如きに非ざることを明す、何を以て之を言ふ、夫れ法性は淸淨畢竟無生なり、生と言ふは是れ得生者の情なるのみ。

（往生論註）

◉問て曰く、上に生無生を知るといふは、當にこれ上品生の者たるべし、若し下々品の人は十念に

乘じて往生す、豈實生を取るに非すや、但し實生を取らば、卽二執に墮す、一には恐く往生を得さらん、二には恐く更に生して惑を生せん、答ふ譬へば淨摩尼珠、之を濁水に置けば卽ち淸淨なるが如し、若し人無量生死の罪濁ありと雖も、彼阿彌陀如來の至極無生、淸淨寶珠の名號を聞きて、之を濁心に投せば、念々の中罪滅し心淨くして卽ち往生を得、又是れ摩尼珠、玄黃の幣を以て裹んで、之を水に投せば、水卽ち玄黃、一に物色の如し、彼淸淨の佛土には、阿彌陀如來の無上

寶珠あり、無量の莊嚴功德成就の錦を以て裹み、之を往生する所の者の心水に投ぜ、豈生見を轉じて、無生智たる能はざらんや、又氷上に火を燃やし、火猛ければ則ち氷解く、氷解ければ則ち火滅するが如し、彼下品の人、法性無生を知らぎと雖も、たゞ佛名を稱する力を以て、往生の意をなし、彼土に生せんと願せば、彼土はこれ無生の界見生の火自然にして滅せん。

（往生論註）

釋尊出世して、八萬四千の法門をときたまふことは、三乘五乘をして、同く一實眞如の理性を學せ

しめんが爲なり、然るに根性利なるものは、皆益を得しかども、鈍根無智のものは、開悟しがたきが故に、かの劣機のために、淨土の門をひらきて佛の願力に乘じて、淨土に生じ、淨土にして無生のさとりをうべしと示なり。

（歩船鈔）

快樂のために聞きてねがひ、願ひてかの生因をたつね、尋ねて念佛に歸し、歸して淨土に生じ、生しぬれば無生を證し、涅槃のさとりをひらくが故に、かのさとりにかなひぬれば、無苦無樂の位に至る、即ちこれを大樂となづくるなり、大樂と極

樂とその義同じ。（顯名鈔）

●されば往生といふは、凡夫の情量におはせて是をいふ言なり、實の生死にはあらざるなり、他力の本願に乘じ、無生の名號を稱して、一乘清淨の土に往生すれば、かの土はこれ法性無性のさかひなるが故に、凡情には生ぞと思へは、自然に無生の理にかなふなり。（顯名鈔）

●されば往生といへるも、生即無生の故に、實には不生不滅の義なり。（眞要鈔）

●金剛の志を起せば、横まに四流を超斷して、垢障の凡夫直に高妙の報土に入る、これ未だ諸教のとかざるところ、諸宗の未だ談せざる所なり、此報土といふは、彌陀の果德涅槃の土なるが故に、生ぞれば無生に契當して、速に無爲法性の身を證す、是即ち頓教の極致なり。（決智鈔）

●無生の生とは、極樂の生は三界をへめぐる心にてあらざれば、極樂の生は無生の生といふなり。（御一代記聞書）

生即無生なるが故に是竟平等無差

●彼の佛國土は、清淨安穩にして微妙快樂なり、無爲泥洹の道にちかし、其の諸〳〵の菩薩天人、智

別の證悟なり

慧高明にして神通洞達せり、咸な同く一類にして形に異狀なし、但た餘方に因順するが故に、人天の名あり、顏貌端正世に超へて希有なり、容色微妙にして天に非ず人に非ず、皆自然虛無の身、無極の體を受くるなり。（無量壽經）

◉安樂聲聞菩薩衆、人天智慧はがらかに、身相莊嚴みなおなし、他方に順じて名をつらぬ、顏容端正たぐひなし、精微妙軀非人天、虛無之身無極體、平等力を歸命せよ。（和讃）

◉平等心を得るときを、一子地と名けたり、一子地は佛性なり、安養にいたりてさとるべし。（和讃）

◉天人不動の聖衆は、弘誓の智海より生ず、心業の功德淸淨にて、虛空のごとく差別なし。（和讃）

◉如來淸淨本願の、無生の生なりければ、本則三々の品なれど、一二もかはることなき。（和讃）

◉往生を願ふ者、本は則ち三々の品なれども、今は一二の殊なることなし、亦緇澠の一味なるが如し馬くんぞ思議すべけんや。（淨土論）

◉大願淸淨の報土には、品位階次を云はず、一念須臾のあいだに、速かに疾く無上正眞道を超證す

故に横超といふなり。

凡聖逆謗齊しく會入し、衆水の海に入て一味なるが如し。（教行證文類）

必ず滅度に至る、必ず滅度に至れば即ち是れ常樂なり、常樂は即ちこれ畢竟寂滅なり、寂滅は即ちこれ無上涅槃なり、無上涅槃は即ちこれ無爲法身なり、無爲法身は即ちこれ實相なり、實相は即ちこれ法性なり、法性は即ちこれ眞如なり、眞如は即ちこれ一如なり。（正信念佛偈）

解脫とは無上々と名く、無上々は即ち眞解脫、眞解脫は即ちこれ如來なり、若し阿耨多羅三藐三菩提を成ぜることを得おはりて、無愛無疑なり、無愛無疑は、即ち眞解脫なり、眞解脫は即ちこれ如來なり如來は即ちこれ涅槃なり、涅槃は即ちこれ無盡なり、無盡は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ決定なり、決定は即ちこれ阿耨多羅三藐三菩提なり。（教行證文類）

無上々は眞解脫、眞解脫は如來なり、眞解脫にいたりては、無愛無疑とあらはるゝ。（和讃）

如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性となづけたり

凡地にしてはさとられぞ、安養にいたりて證すべし。

（和讃）

●涅槃とまうすに其名無量なり、くはしくまうすにあたはぞ、おろく其名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性すなはち如來なり。

（唯信鈔文意）

往生して涅槃を證すべば大悲を起して衆生を利益す

（四）利他教化

●又廻向と言ふは、彼國に生じおはりて、還て大悲を起し、生死に廻入して衆生を教化せるを、亦廻向と名くるなり。

（教行證文類）

●爾れば大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜かに、衆禍の波轉す、即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を證し、普賢の德に遵ふなり。

（教行證文類）

●還相廻向といふは、則ち利他教化地の益なり、即ちこれ必至補處の願より出たり、亦一生補處の願と名く、亦還相廻向の願と名くべし、願成就の

文、經にのたまはく、彼國の菩薩、皆當に一生補處を究竟すべし、其本願衆生の爲の故に弘誓の功德を以て自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脫せんと欲せんをば除かんと、聖言明に知りぬ、大慈大悲の弘誓、廣大難思の利益、乃し煩惱の稠林に入て、諸有を開導し、則ち普賢の德に遵ふて、群生を悲引す。

（淨土文類聚鈔）

●出の第五門とは、大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身を示す、生死の園煩惱の林の中に廻入して、神通を遊戲して敎化地に至る、本願力の廻向を以ての故に、是を出の第五門と名く

（淨土論）

●還相とは彼土に生れ已りて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を敎化し、共に佛道に向はしめたまへり

（往生論註）

●蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身を證し、煩惱の林に遊んで神通を現し、生死の園に入て應化を示す。

（正信念佛偈）

●必ず無量光明土に至れば、諸有の衆生皆普く化

す。

◎安樂無量の大菩薩、一生補處にいたるなり、普賢の德に歸してこそ、穢國にかならず化するなれ。（正信念佛偈）

◎願土に至れば、速に無上涅槃を證してぞ、すなはち大悲をおこすなり、これを廻向と名けたり。（和讃）

◎如來の廻向に歸入して、願作佛心をうるひとは、自力の廻向をすてはて、利益有情はさはりなし（和讃）

極樂に往生する往相も衆生化益に

◎還相廻向ととくことは、利他教化の果をえしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の德を修するなり（和讃）

◎このさとりをうれば、即ち大慈大悲さはりて、生死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを、普賢の德に歸せしむるといふなり。（唯信鈔文意）

（五）他力廻向

◎夫れ眞宗の教行信證を案ぜれば、如來大悲廻向の利益なり、故に若は因、若は果、一事として阿

出る還相も共に他力廻向なり

彌陀如來淸淨願心の廻向成就したまへる所に非ることあることなし、因淨なるが故に果も亦淨なり。

（教行證文類）

●大涅槃を證することは、願力の廻向によるなり。

（教行證文類）

●弘願と言ふは大經に說くが如し、一切善惡の凡夫生を得る者、皆阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣となさゞるはなし。

（玄義分）

●但だ信心求念せしめば、上一形を盡し、下十聲一聲等に至るまで、佛の願力を以て往生を得易し。

●佛の願力によるが故に、十念々佛して便ち往生を得。

（往生禮讚）

●佛の願力によるが故に、正定聚に住せしむ、正定聚に住せるが故に、必ず滅度に至らむ。

（往生論註）

●佛の願力によるが故に、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の德を修習し、常倫諸地の行を超出するを以ての故に、ゆへに速あることを得。

（往生論註）

◎若は往、若は還、皆衆生を扳て生死海を渡さんがためなり、是の故に廻向を首として、大悲心を成就することを得るが故にとのたまへり。

（教行證文類）

◎本願力の廻向に二種の相あり、一には往相、二には還相。

（淨土文類聚鈔）

◎往還の廻向は他力に由る。

（正信念佛偈）

◎往相の廻向ととくことは、彌陀の方便ときたり悲願の信行えしむれば、生死すなはち涅槃なり。

（和讃）

◎願土にいたればすみやかに、無上涅槃を證してぞすなはち大悲をおこすなり、これを廻向と名けたり。

（和讃）

◎度衆生心といふことは、彌陀智願の廻向なり。

（和讃）

◎今報土得生の機にあたへまします佛智の一念は、卽ち佛因なり、かの佛因にひかれて、うるところの定聚の位、滅度にいたるといふは、すなはち佛果なり、この佛因佛果に於ては、他力より成ぜれば、更に凡夫の力にてみたすべきにあらぜ。

第十九願の

●往相還相の二種の廻向は、凡夫としては更に起ざるものなり、ことゝく如來の他力よりおこさしめられたり。（改邪鈔）

●そのたのむこゝろといふは、卽ち是れ阿彌陀佛の衆生を、八萬四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を衆生にあたへましますこゝろなり。（御文）

（附）

●至心發願の願（邪定聚の機、雙樹林下往生、無量壽佛觀經の意なり）至心廻向の願（不定聚の機、難思往生、阿彌陀經の意なり）（教行證文類）

●定善散善を分別し、三福九品の諸善、あるひは自力の稱名念佛をときて、九品往生をすゝめしむ、これ他力の中に自力なり、これを觀經の宗とす、このゆへに觀經往生といふ、みな方便化土の往生なり、これを雙樹林下往生とまふすなり。（三經往生文類）

●係念我國の人、不可思議の佛力を疑惑して信受せず、善本德本の尊號をおのれが善根とす、みづか

方便門の往生

機は雙樹林下往生なり第二十願の機は難思往生なり

ら淨土に廻向せしむ、これを彌陀經の宗とす、このゆへに彌陀經往生といふ、他力の中の自力なり尊號を稱するゆへに疑城胎宮に生ると雖も、不可稱不可說不可思議の他力を疑ふ、その罪重くして牢獄にいましめられて、いのち五百歲なり、尊號の德によるが故に難思往生とまふすなり。

（三經往生文類）

● 雙樹林下の往生とは、問ふ其意如何、答ふ、雙樹林とは狗尸那跋提河の邊、大聖釋尊入滅の砌なり、是れ則ち化身入滅の處なるが故に、化土を明すに於て此處を擧るが、難思往生とは、問ふ其意如何、答ふ、是又同く第十八の願、至心信樂決定往生難思議の義に對して、之を難思となす、議の字の有無差別あるべし、淺深知るべし、

（六要鈔會本）

● 雜修の者は執心不牢の人となす、故に懈慢國に生す、若し雜修せずして、專ら此業を行せば、此れ卽ち執心牢固にして、定んで極樂國に生ぜん。

（往生要集）

● 專雜の執心淺深を判し、報化の二土を正しく辨立

方便門の機は或は疑城胎宮或は懈慢邊地といへるが如き化土に往生す

すといふは、雜行雜修の機をすてやらぬ執心ある人は、必ず化土懈慢國に生ずるなり、また專修正行になりきはまるかたの執心ある人は、定めて報土極樂國に生ずべしとなり。（正信偈大意）

●安樂淨土をねがひつゝ、他力の信をえぬ人は、佛智不思議をうたがひて、邊地懈慢にとまるなり。（和讃）

●佛智不思議を疑ひて、自力の稱念このむゆへ、邊地懈慢にとゞまりて、佛恩報ずる心なし。（和讃）

●佛智疑惑のつみにより、懈慢邊地にとまるなり、

疑惑のつみのふかきゆへ、年歲刧數をふるとゝく（和讃）

●不了佛智のしるしには、如來の諸智を疑惑して、罪福信じ善本を、たのめば邊地にとまるなり。（和讃）

●佛彌勒に告げたまはく、此の諸の衆生亦復是の如し、佛智を疑惑するを以ての故に、彼胎宮に生る。（無量壽經）

●光明寺の釋に云く、華に含まれて未だ出でず、或は邊界に生じ、或は宮胎に墮すと。（教行證文類）

⑥罪福ふかく信じつゝ、善本修習するひとは、疑信の善人なる故に、方便化土にとまるなり。（和讃）

⑦罪福信ぜる行者は、佛智の不思議をうたがひて、疑城胎宮にとゞまれば、三寶にはなれたてまつる（和讃）

⑧自力の心をむねとして、不思議の佛智をたのまねば、胎宮にむまれて五百歳、三寶の慈悲にはなれたり。（和讃）

⑨自力稱名のひとはみな、如來の本願信ぜねば、うたがふつみのふかきゆへ、七寶の獄にぞいましむる。（和讃）

第四節　行業

第一項　行業の意義

⑩何者か五とする、一には身業禮拜門、いはゆる一心專至して、恭敬合掌、香華供養して彼阿彌陀佛を禮拜す、禮すれば卽ち專ら彼佛を禮して畢命を期とす、餘禮を雜へず、故に禮拜門と名く、二には口業讃嘆門、いはゆる、意を專にして、彼佛の身相光明、一切の聖衆の身相光明、及び彼の國中の一切の寶莊嚴光明等を讃嘆す、故に讃嘆

本宗に於ては善導大師の所謂起行作業は獲信の上顯現する報恩の經營なりとす起行に五念門あり此起行は本と第十八願に乃

至十念と誓ひたまへるより出たるものにて多念の稱名は報恩の行とするなり此稱名口業なきも固より三業相應する故開けば上の五念門となるなり

門と名く、三には意業憶念觀察門、いはゆる意を專にして、彼の佛及び一切の聖衆の身相光明國土、莊嚴等を念觀す、故に觀察門と名く、四には作願門、いはゆる心を專にして、若は晝若は夜、一切時一切處に、三業四威儀の所作の功德初中後を問はず、皆須く眞實心の中に發願して彼國に生ぜんと願すべし、故に作願門と名く、五には廻向門、いはゆる心を專にして、若は自作の善根及び一切の三乘五道、一々の聖凡等の所作の善根に深く隨喜を生ず、此隨喜の善根及び己れが所作の善根を以て、皆悉く衆生と之を共にして彼國に廻向す、故に廻向門と名く、又彼國に到りおはりて、六神通を得て、生死に廻入して、衆生を教化すること、後際を徹窮して心に厭足なく乃至成佛するを亦廻向門と名く。（往生禮讃）

●設ひ我佛を得むに、十方衆生、心を至し信樂して我國に生れんと欲ふて、乃至十念せん、若し生れざれば正覺を取らじ、唯だ五逆と正法を誹謗せんを除く。（無量壽經）

●人能く是の佛の無量力功德を念ぜば、卽時に必定

報恩の稱名

に入る、是故に我常に念ぜ。（易行品）

●信心歡喜乃至一念のとき、即得往生の義治定の後の稱名は、佛恩報謝のためなり。（最要鈔）

●一生のあひだまふすところの念佛は、みなことごとく如來大悲の恩を報じ、德を謝すとおもふべきなり。（歎異鈔）

●眞實の信心には必ず名號を具すといふは、本願のおこりを、善知識の口よりきゝうるとき、彌陀の心光に攝取せられたてまつりぬれば、攝取の力にて名號おのずから稱へらるゝあり、これ即ち佛恩報謝のつとめなり。（本願鈔）

●一念の信心發得以後の念佛は、自身往生の業とは思ふべからず、たゞひとへに佛恩報謝のためとこゝろへらるべきものなり。（御文）

●自ら信じ、人にも敎へて信せしむるは、難の中に難の難、大悲傳へて普く化する、眞に佛恩を報ずるに成る。（往生禮讚）

●他力の信をえん人は、佛恩報せんためにとて、如來二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし。（和讃）

自信敎人信亦報恩なり

本宗には兼て師主知識の恩をも報ずべきことを教ふ

●娑婆永劫の苦をすて、浄土無爲を期すること、本師釋迦の力なり、長時に慈恩を報ぜべし。（和讃）

●今月二十八日は毎年の儀として、懈怠なく開山聖人の報恩謝德のために、念佛勤行をいたさんと擬する人數これ多し、まことにもて、なかれをくんで本源を尋ぬる道理を存知せるが故なり。（御文）

●これによりて貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を、決定せしめんこと、まことに彌陀如來の本願にあひかなひ、別しては聖人の御本意にたりぬべきものか。（御文）

忌日に讀經するは死者の冥福を修する爲にあらず其意佛恩報謝たるべきなり

●親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛申したること未だ候はず、其故は、一切の有情は、みな以て世々生々の父母兄弟なり、いづれもくこの順次生に、佛になりてたすけさふらふべきなり我力にて勵む善にても候はゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけ候はめ、たゝ自力をすてゝ急ぎさとりをひらきなば、六道四生のあはれ、いづれの業苦に沈めりとも、神通方便をもて、まつ有緣を度すべきなりと。（歎異鈔）

●たとひわきなひをするとも、佛法の御用と心得べ

世間の事業も凡て報恩の心を以てなすへし

し。

當流には總体世間機わろし、佛法のうへより何事もわひはたらくべし。

皆人毎によきことをいひもし、働もすることあれば、眞俗ともにそれをわがよき者にはやなりて其心にて御恩といふ事をうち忘れて、我心本になるによりて、冥加につきて、世間佛法ともに惡き心が必ず〳〵出來するなり、一大事なり。

（御一代記聞書）

報恩の行業

●されば善知識にあひたてまつり、法をきゝて領解するときは往生は定まるなり、其後名號のとなへらるゝは、大悲弘誓の恩を報じたてまつるなり、それも行者の方より稱へて佛恩を報ずるにはあらず他力よりもよほされたてまつりて、となふれば自かる佛恩報謝となるなり、信も行もかつて行者の所作ならず、但た他力といへり。

（淨土見聞集）

は他力の廻向なり

獲信の人は佛恩を報する恩あり又報ずること肝要なり

第二項　報恩の稱名

●彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうる人は、
憶念の心つねにして、佛恩報ずるおもひあり。

（和讃）

◎諸佛の護念證誠は、悲願成就の故なれば、金剛信をえん人は、彌陀の大恩報ぜべし。（和讃）

◎信心すでにえん人は、つねに佛恩報ぜべし。（和讃）

◎彌陀の報土をねがふ人、外儀のすがたはことなりと、本願名號信受して、寤寐にわすることなかれ。（和讃）

◎夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜已に非す、出沒必す由あるか如し、恩を知り德を報ぜる、理宜しく先づ啓くべし、又所願輕からぜ、若し如來威神を加へたまはぜば、將た何を以てか達せむ、神力を乞加す所以に仰で告ぐ。（往生論註）

◎所以に精勤して倦まぜ、常に當に佛恩を念じ、報盡を期とし、心に恒に計念すべし。（往生要集）

◎爰に久しく願海に入て、深く佛恩を知れり、至德を報謝せんが爲めに、眞宗の簡要を撫ふて、恒常に不可思議の德海を稱念す、彌これを喜愛し、特に斯を頂戴す。（教行證文類）

◎うれしさを昔はそでにつゝみけり、こよひは身に

内に信あれば外に彰はる

もあまりぬるかな。（御文）

眞實信心の獲得したる人は、必らず口にもいだし又色にもそのすがたはみゆるなり。（御文）

信心治定の人は、誰によらず、まづみれば即ち尊とくなり候、これその人のたふときにあらず、佛智をえらるゝかゆへなれば、彌陀佛智のありがたきほどを存ぜ心べきことなりと。（御一代記聞書）

主たる佛恩報謝は念佛なり

人能く是佛の無量力功德を念ぜば、即時に必定に入る、是故に我常に念す。（易行品）

大智度論に依るに三番の解釋あり、第一には、佛はこれ無上法王なり、菩薩は法臣とす、尊くするところ重んするところ、唯佛世尊なり、この故にまさに常に念佛すべきなり、第二には諸の菩薩ありて、自ら云く、我曠劫よりこのかた、世尊我等が法身、智身、大慈悲身を長養したまふことを蒙ふることを得たりき、禪定、智慧、無量の行願佛に由て成ぜることを得たり、報恩のための故に常に佛に近かんことを願ぜ、亦大臣の王の恩寵を蒙ふりて、常にその王を念ふが如し、第三には、諸の菩薩あり、復この言をなさく、われ因地に

して、悪知識に遇ふて、般若を誹謗して悪道に墮しき、無量劫をへて餘行を修すと雖も、未だ出ることと能はず、後に一時に於て、善知識のほとりによりしに、我を教へて念佛三昧を行せしむ、その時に即ち能く併しながら諸の障をして方に解脱することをえせしめたり、この大益あるが故に、願じて佛を離れざる。（安樂集）

◉わが身の往生、一定とおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛心恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛心にいれてまふして、世の中安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとそ、おぼえさふらふ。（御消息集）

◉唯能く常に如來の號を稱して、應に大悲弘誓の恩を報ずべし。（正信念佛偈）

◉無常の根機を本とするゆへに、一念をもて往生治定の時刻と定めて、いのちのぶれば、自然と多念に及ぶ道理をわかせり、されば平生のとき、一念往生治定のうへの、佛恩報謝の多念の稱名とならふところ、文證道理顯然なり。（口傳鈔）

◉また念佛のまふされんも、たゞ今さとりをひらか

んとする期の、ちかづくにしたがひて、いよ〳〵彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそ候はめ。

（歎異鈔）

●たゞほれ〳〵と、彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいたしまひらすべし、しかれば念佛も申され候、これ自然なり。

（歎異鈔）

●眞實の信心にはかならず名號を具すといふは、本願のおこりを、善知識の口よりきゝうるとき、彌陀の心光に攝取せられたてまつりぬれば、攝取の力にて、名號おのづからとなへらるゝなり、これすなはち佛恩報謝のつとめなり。

（本願鈔）

●出世に取ては、本師能化の重恩を謝したてまつらんかために、かの名號を唱へ給ふものなり。

（報恩記）

●この恩をよく〳〵存知して、あらたふとやと念佛するは、佛恩の御ことを、聖人の御前にて、よろこびまふすこゝろなり。

（御一代記聞書）

●一、仰に彌陀をたのみて、御たすけを決定して、御たすけのありがたさよと、よろこぶ心あれば、そのうれしさに念佛まうすはかりなり、すなはち

佛恩報謝なり。

（御一代記聞書）

●御たすけありつることのありがたさよく〳〵と、心に思ひまいらするを、口に出して、南無阿彌陀佛〳〵とまうすを、佛恩を報ぜるとはまうすなり。

（御一代記聞書）

●弘誓のちからをかふらぎば、いづれのときにか娑婆をいでん、佛恩ふかくおもひつゝ、常に彌陀を念ぜべし。

（和讃）

●このうへの稱名は、御恩報謝と存じ、よろこびまうし候。

（改悔文）

●葬送中陰の間、念佛報恩ふたごゝろなく、勤行の丹誠を抽んでゝ、五旬の忌辰を經をはりぬ。

（遺德記）

●ふかく善知識の御教のごとく、佛智を信ぜる心あれば、稱名もおこたらぎ、是れ佛祖報恩のためなり。

（反古裏）

●法をきく、みちにこゝろのさだまれば、南無阿彌陀佛とゝなへこそすれ。

（御文）

●正雜の分別をさゝわけ、一向一心になりて、信心決定のうへに、佛恩報盡のために、念佛まうすこ

ゝろは、おほきに各別なり。

●このうへには、何と心えて念佛申すべきそなれば往生はいまの信力によりて、御たすけありつる、かたじけなき御恩報謝のために、我いのちわらんかぎりは、報謝のためとおもひて、念佛まうすべきなり。（御文）

●これによりて平生のとき、一念往生治定のうへの佛恩報盡の多念の稱名と、ならふところなり。（御文）

●かたじけなくも、一たび他力の信心をえたらん人は、みな彌陀如來の御恩のありがたきほどを、よくゝおもひはかりて、佛恩報謝のためには、つねに稱名念佛を申したてまつるべきものなり。（御文）

●なおゝたふとく、思ひたてまつらん心のおこらん時は、南無阿彌陀佛〳〵と、時をもいはず、ところをもきらはず、念佛申すべし。（御文）

第三項　稱名の意相

●御たすけありたることのありがたさよと、念佛申すべく候や、又御たすけあらふずる事のありが

念佛をとなへる心ばへ御たすけあり

たることのありがたさ又御助けあらふずることのありがたさよと思ひて念佛すへし

たさよと、念佛申すべく候やと、申しあげ候とき、仰にいづれもよし、たゝし正定業のかたは、御たすけありたるとよろこぶ、滅度のさとりのかたは、御たすけあらふすることの、ありがたさよと申すこゝろなり、いづれも佛になることをよろこぶこゝろ、よしと仰候なり。

（御一代記聞書）

●名號をたゞとなへて、佛にまいらする心にては、ゆめ〳〵なし、彌陀をしかと御たすけ候へと、たのみまいらすれば、やがて佛の御たすけにあづかるを、南無阿彌陀佛とまうすなり、しかれば御たすけにあづかりたることの、ありがたさよ〳〵と申すを、佛恩を報ずるとは申すことなりと仰候ひき。

（御一代記聞書）

●一心決定のうへ、彌陀の御たすけありたりといふは、さとりのかたにしてわろし、たのむ所にてたすけたまひ候事は、歴然に候へとも、御たすけあらふぞといふて、然るべきの由仰られ候。

（御一代記聞書）

●信のうへは、たふとく思ひて申す念佛も、又ふと

尊こく思ひて申す念佛も又ふと申す念佛も佛恩にそなはる

申す念佛も佛恩にそなはるなり。（御一代記聞書）

●南殿とやらんにて、人蜂を殺し候に、思よらぎる念佛申され候、其時何と思ふて念佛をは申たると、仰られ候へば、たゞかあひやと存ぜるばかりにて申候と、申されければ、仰られ候は、信のうへは何ともあれ、念佛申は報謝の義と存ぜべし、皆佛恩になると仰られ候。（御一代記聞書）

●一、信のうへは、佛恩の稱名退轉あるまじき事なり、或は心よりたふとく有難く存ぜるをば佛恩を思ひ、たゞ念佛の申され候をは、それはどに思はざることと、大なる誤りなり、自ら念佛の申され候こそ、佛智の御もよほし、佛恩の稱名なれと仰事に候へ、蓮如上人仰られ候。（御一代記聞書）

多念の稱名を以て往生のための正因とつのることわろし稱名は全く佛恩報謝のためたるべし

●信心歡喜乃至一念のとき、即得往生の義治定の後の稱名は、佛恩報謝のためなり、さらに機のかたより、往生の正行とつのるべきにあらぎ。（最要鈔）

●一念にてたりぬとしりて、多念をはげむべしといふ事、このこと、多念も一念も共に本願の文なり

いはゆる上盡一形下至一念と釋せらる、これその文なり、然れども下至一念は、本願をたもつ往生決定の時刻あり、上盡一形は、往生即得のうへの佛恩報謝のつとめなり、そのこゝろ經釋顯然なるを、一念も多念も共に往生のための正因たるやうに、こゝろへ亂す條、すこぶる經釋に違せるもの歟、されば引くたびも、先達よりうけたまはりつたへしがごとくに、他力の信をは一念に即得往生ととりさだめて、そのとき命終らさらん機はいのちあらんほどは念佛すべし、是即ち上盡一形の釋にかなへり、しかるに世のひと常におもへらく、上盡一形の多念も宗の本意と思ふて、それにかなはざらん機の、すてがてらの一念と心うる歟これまでに彌陀の本願に違し、釋尊の言說にそむけり、其故は如來の大悲、短命の根機を本としたまへり、もし多念をもて本願とせば、いのち一刹那につゞまる無常迅速の機いかでか、本願に乘ぜべきや、されば眞宗の肝要、一念往生をもて淵源とす、されば紀興のことはにも、千里は足の下よりおこり、高山は微塵にはじまるといへり、一念

は多念のはじめたり、多念は一念のつもりなり、共にもて相離れざと雖も、表とし裏となる所を、人皆まぎらかすもの歟、今のこゝろは、一念無上の佛智をもて、凡夫往生の極促とし、一形憶念の名願をもて、佛恩報盡の經營とすべしとつたふるものなり。

（口傳鈔）

●佛恩のふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するたにも、彌陀の御誓の中に、第十九第二十の願の、御あはれみにてこそ、不可思議の樂にあふことにて候へ、佛恩のふかきことそのきはもなし、いかにいはんや、眞實の報土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩よく〳〵御案ともさふらふべし、これさらに性信房、親鸞かはからひ申すにはあらざ候。

（末燈鈔）

●詮じ候ところは、御身にかぎらざ、念佛申さん人々は、我御身の料におぼしめさざとも、朝家の御ため、國民のため、に念佛を申しわはせたまひ候はゞ、めでたく候べし、往生を不定とおぼしめさん人は、先づ我身の往生をおぼしめして、御念佛候べし、我身の往生一定とおぼしめさん

人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛心にいれて、申して世の中安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすへしと覺へ候、よくく御按候べし、往生一定と思ひ定められ候ひなば、佛の御恩をおぼしめさんには、こと事は候ふべからぞ、御念佛を心に入れて、申させたまふべしと覺へ候。

（御消息集）

善導の所謂作業に就ての四修は即ち報恩の念佛を修する方法を示す

第四項　作業の修法

何者をか四とする、一には恭敬修、いはゆる彼佛及ひ彼の一切の聖衆等を恭敬禮拜す、故に恭敬修と名く、畢命を期として中止せざる、即ちこれ長時修なり、二には無餘修、いはゆる專ら彼の佛の名を稱して、彼の佛及び一切の聖衆等を、專念專想專禮專讃す、餘業を雜へぞ、故に無餘修と名く畢命を期として誓て中止せざる、即ち是れ長時修なり、三には無間修、いはゆる相續して、恭敬、禮拜、稱名、讃嘆、憶念、觀察、廻向發願す、心々相續して餘業を以て來りへだてぞ、故に無間修と名く、又貪瞋煩惱を以て來りへたてず、隨犯隨懺して、念を隔て時を隔て日を隔てしめぞして

常に清浄ならしむるを、亦無間修と名く、畢命を期として中止せざる、即ちこれ長時修なり。

（往生禮讃）

●彌陀大悲の誓願を、ふかく信せん人はみな、ねてもさめてもへたてなく、南無阿彌陀佛をとなふべし。

（和讃）

●男女貴賤ことごとく、彌陀の名號稱するに、行住坐臥もえらばれず、時處諸緣もさはりなし。

（和讃）

第五項　自信教人信

獲信は即ち報恩なり

●よしなき自力の執心にはだされて、むなしく流轉の故郷にかへらんこと、かへすがゝもかなしかるべきことなり、釋尊もいかばかり、往來娑婆八千返の甲斐なきことをわはれみ、彌陀もいかばかり、難化能化のしるしなきことを悲しみたまふらん、もし一人なりとも、かゝる不思議の願行を信ずることあらば、まことに佛恩を報ずるなるべし。

（安心決定鈔）

●十二月六日に、富田殿へ御下向にて候あいた、五日の夜は大勢御前へまいり候に、仰に今夜はな

にことに人多く來りたるぞと、順誓申され候はば歳末の御禮のためならんと申しあげられけり、その時仰に無益の歳末の禮かな。歳末の禮には、信心をとりて禮にせよと、おほせ候ひき。

（御一代記聞書）

人に教へて信ぜしむる亦報恩なり

自ら信じ人に教へて信せしむ、難きが中に轉た更に難し、大悲を傳へて普く化す眞に佛恩を報ずるに成る。

（往生禮讃）

若し一人をだも、苦をすて〻生死を出ることを得せしむるは、是を眞に佛恩を報ぜと名く、何を以ての故に、諸佛世に出で〻、種々の方便をもて衆生を勸化したまふは、直に惡を制し福を修して、人天の樂を受けしめんと欲するにあらぜ、人天の樂は猶し電光の如し、須臾に即ち捨て〻、還りて三惡に入て長時に苦を受く、此の因緣のために、た〻勸めて淨土に生ぜることを求めて、無上菩提に向はしめたまふなり、この故に今の時の有緣を相ひすゝめて、誓ふて淨土に生せしむるは、即ち諸佛の本願にかなふなり。

（定善義）

然ればかつは佛恩を報せんがため、かつは師德を

謝せんがために、この法を十方にひろめて、一切衆生をして、西方の一土にすゝめいれしむべきなり。

（眞要鈔）

●自信教人信と候ときは、まつ我か信心決定して人にも教へて佛恩にあるとのことに候、自心の安心決定して教るは、即ち大悲傳化の道理ある由同く仰られ候。

（御一代記聞書）

●佛法をは學匠物しりはいひたてす、たゞ一文不知の身も、信ある人は佛智を加へらるゝ故に、佛力にて候間、人か信を取るあり、此故に聖教よみとて、しかも我はと思はん人の、佛法をいひたてたることなしと、仰られ候ことに候、たゞ何としらねども、信心定得の人は、佛よりいはせらるゝ間、人か信をとるとの仰に候。

（御一代記聞書）

●各に仰置るゝ旨は、われ去世せは、大阪より持たせらるゝ處の曲禄に乘せて、正信偈、同く念佛して御影前へうつし申すべし、年來同行のしるし佛法のよしみあれば、みたくもあるへし、また見られたくも思ふなり、强ちに名聞にはあらぜ、我

を見て門葉悲歎するたぐひこれあらば、是の如きの事を縁としても、人々信をとるべき間、暫くかやうに思よるあり。（遺德記）

●信心まことに得させたまひて、佛恩報せん身は、如來二種の廻向を十方へひろめ、後世に志なきものを、彌陀の御誓にすゝめ入させたまはゞ、如來の御恩を報じたまふになり候、また人を教化する身にて、勝他名聞の心にて候はゞ、眞の報佛恩の人に候はゞ候、たゞ我得たる信心のとをりを、人にも教へ同一淨土の身とならんと思召べく候、慢の心にて人を教化したまはゞ、魔も便を得、自損々他とて共に往生かつてありがたく候おそるべし、つゝしむべし。（教名集）

●他力の信をえん人は、佛恩報せんためにとて、如來二種の廻向を、十方にひろむべし。（和讃）

●他力の信心發得せしむるうへなれば、せめてはかやうに口すさみても、佛恩報謝のつとめにもなりぬべきとも思ひ、又きく人も宿緣あらば、などや同じ心にならざらんと、思ひはんべるなり。（御文）

●各々に改悔の心をおこして、我身のあやまれるところの心中を、心底にのこさゞして、當寺の御影前に於て、廻心懺悔して、諸人の耳にこれをきかしむるやうに毎日毎夜にかたるべし、これすなはち謗法闡提廻心皆往の御釋にもあひかなひ、また自信教人信の義にも相應すべきものなり、然らばまことに心あらん人々は、この廻心懺悔をきゝてげにもとおもひて、同く日ごろの惡心をひるがへして、善心になりかへる人もあるべし、これぞまことに今月聖人の御忌の本懷にあひかなふべし

師主知識の恩德を謝すること肝要なり

これすなはち報恩謝德の懇志たるべきものなり。

（御文）

●信心決定の人々も、會合のときは相互に信心の沙汰あらば、これすなはち眞宗繁昌の根元なり。

（御文）

第六項　師恩の報謝

●今より佛果に至るまで、長劫佛を讃めて慈恩を報せん、彌陀弘誓の力を蒙らゞんば、何れの時何れの劫にか娑婆を出でん、いかんしてか今日寶國に至ることを期せむ、實にこれ娑婆本師の力なり、

若し本師知識の勸めに非ざんば、彌陀の淨土云何んぞ入らん、淨土に生ずることを得て慈恩を報ぜよ。

（般舟讃）

●歸去來他鄉には停まるべからず、佛に從ふて本家に歸せよ、本國に還りぬれば、一切の行願自然に成じて、悲喜交はり流る、深く自ら度るに、釋迦佛の開悟によらざれば、彌陀の名願何れの時にか聞かん、佛の慈恩を荷ひても實に報じがたしと

（法事讃）

●彌陀如來超世の本願を起し給ふとも、釋迦如來これを說述べ給はざれば、娑婆の衆生いかでか出離の道を知ん、たとひ又釋尊西天に出でゝ、三部の妙典をとき、五祖東漢に生れて、西方の往生を敎へたまふとも、源空親鸞これをひろめたまふことなく、次第相承の善知識これをさづけたまはざれば、我等いかでか生死の根現をたゝん、まことに連劫累劫をふとも、その恩德をむくひがたきものなり

これによりて善導和尙の解釋をうかゞふに、身を粉にし骨をくだきても、佛法の恩をば報ぜべしとみへたり、これすなはち佛法のためには、身命を

もすて財寶をも惜むべからざるこゝろなり、この故に摩訶止觀の中には、一日にみたび恒沙の身命をすつとも、なを一句の力を報ぜること能はし、況んや兩肩に荷負ふて、百千萬劫すとも、むしろ佛法の恩を報ぜんやといへり、恒沙の身命をすてゝもなを一句の法門をきける報ひには及ばぎして順次往生の教をうけて、このたび生死を離るべき身となりぬは、一世の身命をすてん、物の數なるべきにあらぎ、身命なをおしむべからぎ、況んや財寶をや、此故に斯今王の私訶提佛につかへ、梵

摩達か珍寶丘比につかへし、飲食、衣服、臥具、醫藥の四事の供養をのへき、これみな念佛三昧の法をきかんかためなり、凡そ佛法にあふことはおほろげの緣にてかなはぎ、愚なる志にては遂げかたきことなり、大王の妙法を求めし、給仕を千歲にいだし、常啼の般若をきゝし、五百由旬の城にいたる、されば佛法を行ぎるには、家をも出で又欲をもすてゝ修行すべきに、世をもそむかぎ、名利にもまつはれながら、めでたき無上の佛法をきゝて、ながく輪廻の故郷をはなれんことは、ひ

とへにはからざる幸なり、誠にこれ本師知識の恩德にあらざるといふことなし、力の堪へんにしたがひて、いかでか報謝の志をぬきいでさらんや

（持名鈔）

●凡そ無始よりこのかた、生死にめぐりて六道四生をすみかとせしに、いま永き輪廻のきつなをきりて、無爲の淨土に生ぜんこと、釋迦彌陀二尊の大悲によらざることなく、代々相承の祖師、先德善知識の恩德にあらざるといふことなし。

（持名鈔）

●娑婆永劫の苦をすてゝ、淨土無爲を期すること、本師釋迦の力なり、長時に慈恩を報ぜべし。

（和讃）

●如來大悲の恩德は身を粉にしても報ぜべし、師主知識の恩德も骨をくだきても謝ずべし。

（和讃）

●今生の患難をすくふ、なをその報酬をいたす、況んや文字をならはんに於てをや、浮生は一旦の果報なり、遂にはたもつべき身命にあらざ、文字は法身の假名なり、智解を生ずる源なるが故なりたゞ文字を學せるその恩なを重しとす、いはんや

佛教をならへる德に於てをや、文字はたゞ智を發する源なり、佛教は未來の了因のたねとなるが故なり、只總じて今生の名利のために佛法修學せん、なを了因の佛性となるべし、いはんや後生菩提のために、彌陀の法をさづけられて、ながく生死を超斷して、永生の樂果を期せんに於てをや、まことに恒沙の身命をすてゝも報ずべし、生前にも最も尊重頂戴の志をぬきんで、沒後にも追修追善のつとめを致べきなり、その追善のつとめには念佛第一なり。

（報恩記）

●眞實報土にいたり候はんこと、このたび一念聞名にいたるまで、うれしさ御恩の至りに候、佛恩のふかさ、師主の恩德のうれしさ、報謝のためにたゞ御名をとなふるばかりにて、日の所作とす。

（末燈鈔）

●この御ことはり聽聞申しわけ候こと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩とありがたく存じ候。（改悔文）

●すみやかに本願眞實の他力信心をとりて、我身の今度の報土往生を決定せしめんこそ、まことに聖